郭沫若研究会報

第 30 号（総 No. 31 号）

目　次

成仿吾の欧州行〔十二〕
　　―旅欧共産主義組織の設立、そして『赤光』発行へ
　　【上】旅欧共産主義組織の設立―
　　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・成家徹郎（１）
郭沫若を発見したのは郭虞裳かそれとも宗白華か？
　　・・・・・・・・・・・・・・・・・・廖久明著、岩佐昌暲訳（11）
大正期のイバネスブームと郭沫若への影響
　　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・藤田梨那（27）

新刊紹介　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・(49)

学術活動報告　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・(55)
2025 年学会案内

訃報　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・(56)
編集後記
会費に関するお願い

執筆者・翻訳者紹介　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・(57)

2024 年 11 月 11 日

日本郭沫若研究会事務局
http://icy-saga-8795.cheap.jp/wordpress/

成仿吾の欧州行〔十二〕旅欧共産主義組織の設立、そして『赤光』発行へ
【上】旅欧共産主義組織の設立

成家徹郎

まずこの時期（１９２２年～２４年）における郭沫若と成仿吾および王独清の活動をざっと見ておこう。

◇　郭沫若と成仿吾

彼らは日本留学の数人と何度も協議をかさねて、創造社の成立をめざした。１９２１年１０月、郭沫若の『女神』出版をもって創造社の実質上の旗上げとする。（伊藤虎丸『創造社研究』「創造社小史」）

１９２２年、郭沫若は、九州帝国大学医学部に在学中であったが、文学に対する思い強く文学面の活動に精力を傾注する。１９２２年５月、郁達夫、成仿吾たちと上海で『創造』季刊第一巻第一期を発刊する。７月、『創造』第二期を編集するために上海に行く。

１９２３年３月、医学部卒業。４月、家族みんなで帰国、上海に住む。成仿吾とともに文学活動に熱中する。ニーチェ『ツァラトゥストラ』の翻訳に着手。ほかドイツの詩をたくさん翻訳。９月、関東大震災で大杉栄夫妻が虐殺されたことを聞き、『国家的与超国家的』を書く。１９２４年１月、レーニン逝去を悼んで詩『太陽没了』をつくる。２月、経済的困難のゆえ妻子をしばらく福岡に帰す。４月、上海での生活がいやになり、福岡へ行く、成仿吾たちが見送る。８月、成仿吾に手紙を書き“僕はいまマルクス主義の徹底的信徒になった”とつげた。１１月、家族とともに上海に帰る。

成仿吾は１９２１年４月、郭沫若とともに上海へ行く。泰東書局に就職するはずだったが実現しなかった。４月８日、郭沫若と杭州に遊ぶ。５月、湖南に帰り最初、楚怡工業学校で教員になるが、まもなく長沙兵器工場技正（技術師長）も兼任する。湖南に帰ったときに、幼いとき家が決めた結婚を解消する。

１９２２年１０月、上海に来る。創造社の文学活動に専念する。『創造季刊』などに著作や翻訳などを多数発表する。「新文学之使命」、「批評的建設」、「創造社与文学研究会」、など。１９２３年４月、郭沫若は家族全員で上海に来る。成仿吾は、自分が住んでいた住居を郭一家にゆずり、亭子間に引っ越す。７月、『中華新報』主筆・張季鸞の要請にこたえて、成仿吾、郭沫若たちはその「文学副刊」を編集する。『創造日』創刊、郁達夫たちと編集を担当。

１９２４年６月７月、成仿吾は広東大学理学院力学および独語教授、および黄埔軍官学校兵器科技正に就任。１１月、帰郷したついでに上海へ行き、ちょうど福岡から帰ったばかりの郭沫若と会った。（「成仿吾年譜簡編」『成仿吾研究資料』）

この時期、欧州詩人の詩をたくさん翻訳したが、まさか数年後に自分が欧州に行き共産主義活動を行うことになるなど、夢にも思わなかったはずだ。

◇　フランスにいた王独清（１９２０年５月～２５年１２月）

欧州滞在時期の彼の身分について訳者池澤によれば、彼は勤工倹学生ではなく、倹学生で

あった。つまり働きながら学ぶというのではなく、経済的に裕福ではないものの、肉体労働に従事することはなかった。在仏中に、中国の雑誌などに投稿して収入を得ていた。また仏語文を書いてフランスの雑誌に投稿することもあった。

『滞在記』の内容は、おおきく二つに分けることができる。一つは、彼と同船してフランスに行った呉蒻雲（呉若膺を指す）との恋愛事である。王独清は、蒻雲は“美人というほどの容貌ではない”と言っているが、とにかく男性に「もてた」。３、４人の男性（もちろん王独清もふくまれる）が彼女に振りまわされる話だ。手玉にとられた、と言ってもよい。これは青年世界に珍しくない話だ。これだけなら、池澤氏が翻訳する気をおこさなかっただろう。というよりも王氏自身『滞在記』を書くこともなかったはずだ。

この先で述べる周恩来や趙世炎たちの、共産主義組織を設立する活動は、中共から見るとじつに賞賛すべき活動で、じっさいそれに関する当時の資料や回想録の類がたくさん出版された。彼らは中共からみればいわば優等生であって、りっぱな行動であった。それらは確かに私にとって有益なものだ。だがそこに見える記述は、私にいわせると、旅欧中国人の一面だけであるから、満足はできない。当時欧州に中国人はたくさん住んでいた。勤工倹学生いがいに、裕福な家庭の子女もたくさんいた。ほとんど観光旅行のような気持で、そこでの生活を楽しむ人も少なくなかった。もちろん勉強のために来た人もたくさんいた。汪兆銘夫人陳璧君の実弟陳昌祖もそのひとりである。彼は１９２３年から２８年までドイツの大学で勉強した。また１９２９年から３１年までドイツとフランスで生活した。ちょうど成仿吾の旅欧時期とかさなる。成仿吾と違ってありがたいことに彼は『回想録』を書き残したので、欧州社会の実情の一端を知ることができる。

王独清は、蒻雲をめぐる悲惨な恋愛事から目が醒めて、文学以外にドイツの思想なども勉強した。また一時期不運にも貧困の底におちこんだので、下層フランス人との交際も起こった。この方面の記述はとてもありがたい。また大杉栄に関する記述も興味深い。当時、周恩来たち共産主義者にとって最大の敵は無政府主義者であった。これに関してはこの先でくわしく述べることになるであろう。『滞在記』にはまた郭沫若に関する記述もみえる。

郭沫若が、王独清にとってまだ名のみを知る時期のこと。彼について言及がある。（池澤實芳訳『私のヨーロッパ滞在記』〈３〉）

私は、初め、この団体（少年中国学会）と友好的な関係を有していた。（中略）しかしその何人かの同僚は、早くから私と思想上の隔たりが生じていた。最も明らかなのは私と彼らとがその単純な愛国という主旨をスローガンとする新聞を共に主宰していたことだった。（中略）しかし私がすでに一種の当時の環境と正反対の意識を持っていたことを、誰もが承認せざるをえなかった。―　それに対して、彼らは完全に「愛国」の斑（まだら）に剝げた銅像の足を抱いたまま、それを死ぬまで離そうとしなかった。（彼らは、男女関係については極度に潔癖というか、あるいはすっかり伝統的観念にとらわれていた。王独清は“一種の虚偽の道徳観念”と呼ぶ：成家）当初、彼らは私に彼らの団体に入るよう勧誘したのだが、しかし私がまだ正式に態度を示さない時に、パリに赴いた私と蒻雲とが恋愛したことにより

勧誘の話は立ち消えとなった。これらのことについて、その後、鄭白基（鄭伯奇）はかつて、私は郭麥弱（郭沫若）とほとんど完全に同じ情況であると言ったことがある。これは間違いない。郭麥弱はもともとその数人の少年中国学会の重要メンバーと深い関係があった。その後、敵対的となったのは、日本の女性と結婚したからだった。これは今から言えば、おそらく意外に思う方もいるかもしれない。（中略）

私はまだ覚えている。郭麥弱には少年中国学会の出版物に載せた手紙があったが、その時、郭麥弱は文学の事業を始めたばかりの頃で、少年中国学会に対して十二分の情熱を抱いていたようだった。その手紙の中で極力周虚成や汪廣季に対して、曾暨（曾琦）に対してさえ懺悔した。しかも自分を（極度に卑下して：成家）Amoeba[アメーバ]になぞらえた。しかし、それは少年中国の指導者と自任するそれら数人の者たちの心の奥底を少しも感動させなかった。罪人はやはり罪人だった。

ここに言う“手紙”は、宗白華宛ての日付１９２０年１月１８日の手紙である。のち『少年中国』第１巻９期（１９２０年３月）に発表された。（『郭沫若書信集』上巻収録。）これはかなり長文の手紙であるが、池澤氏は訳注でその内容を要領よく紹介している。そこから少し抜粋して以下に記す。

（郭氏は手紙の中で自作旧詩を三つ書いたあと）次のように述べている。

白華兄！　こういう詩は、おそらくあなたの好みではないでしょうし、おそらくこういう詩はあなたの詩と認めることはできないでしょう！「尋死」は、以前、曾暮韓[曾琦]兄以外に読んだ人はいません。暮韓兄は私を知っています！　私は数日前にようやく友達の所から『少年中国』第１、２期を借りてきて読んだばかりです。読んでから、次のような感慨を持ちました。

私が『少年中国』を読んだとき／私は私の学友たちの少年をみた／１人ひとりが天に輝く明星のようで／１人この Stryx（地獄）に埋もれた amoeba の私は／無意識の蠕動をしているだけだ／ああ！　私は私の涙の湖の中の波濤が激しく湧き上がるのを抑えきれなかった！

（暮韓等五人の名をあげ）みな私の昔の学友です。私は彼らに対して、真に自分の劣等感を恥じるばかりで、真に amoeba にも劣るものです！　ああ！　要するに白華兄、私は「人」ではありません。私はだめになった人間です。（以下略）

王独清はまもなく、友人から郭沫若を紹介してもらう。もちろん、まだ面識はない。

私がパリで私の文学創作を始めた時に、遠く海を隔てた日本で、郭麥弱（郭沫若）ら数人が同様の活動を行っていた。しかも、同志を連合し、意見を交換し、共同で努力する準備をしていた。ある日、私は日本人の友人から、私に郭麥弱を紹介してくれるという手紙を受け取った。その手紙にはさらに彼の創作詩１篇が同封されていた。その後、また何度かの間接的な通信を経て、私は郭麥弱と直接的な関係ができた。創造社という名前は、みんなの手紙の中で常に繰り返し言及されていた。

（訳者池澤氏は訳文に詳しい訳注を付けている。しかしここに見える“日本人の友人”に

対しては“不明”としている：成家）

郭沫若が王独清宛てに書いた書信（１９２２年７月２０日）が伝えられている。

独清！

あなたが私に書いた手紙は早くに受け取りました。(一緒に添えた)伯奇のこの手紙は、おそらく私に代わってあなたに対する答えになるでしょう。私はわざわざ汗を流す必要はありません。私は、我々みんなが努力することを望みます。

沫若　七月二十日

（『郭沫若書信集』上）

中国共産党旅欧支部と周恩来（『中国共産党旅欧支部史話』によって述べる。）

勤工倹学生中の先進分子は、かなり系統的にマルクス主義の著作を勉強できる條件にめぐまれたこの仏国で、寸暇をおしんでマルクス主義を学習した。

周恩来は１９２１年春に英国へ行き鉱業労働者の大規模なストライキを調査した。労働者はそれによって収入が減ることになるが、それでも家族は飢えに耐えてストライキを支援した。抑圧されている労働者が資本家と戦う“その精神、魄力、勇敢さ”は実に貴いことだと驚嘆した。（天津『益世報』１９２１年６月２４日）

周恩来はそこで実見した「労資の闘争」は、根本的解決を求める以外に道はない、と確信した。旅欧の初期に、資本主義大国間そして資本主義宗主国と植民地半植民地間の矛盾と闘争を詳細に考察していく過程で帝国主義の本質を認識するようになった。帝国主義は克服不能な内在矛盾をかかえているから、かならず滅亡する必然的命運にある、と考えた。半植民地で半封建的な中国で先進的革命分子は、帝国主義とどうむきあうかという問題では巨大な試練にぶつかっていた。なぜならその時代、帝国主義は世界の半分以上を統治し、見たところ「相当に強大」と思われたからだ。それに勝つことができるのか？　どうしたらうち勝つことができるか？

これは真剣に考えなくてはならない重大問題である。

１９２１年初期、中国革命の方式について語ったとき、ロシアの成功は武力をすみやかに実行するという方法によって旧弊を一掃することができた、と考えた。もしわが国でそれを実行しようとしても積弊はあまりに深く、ロシア式の革命をまねてやる以外に革命の成功はありえないと思われる。だが隣国は強国ばかりで制約を受けやすく、暴力は弾圧の口実とされるから、穏やかにみせてゆっくり実行する方式がよいとも思われる。こういう矛盾する思いは、帝国主義の実態に対する分析がまだ十分でないからであった。その後彼は、欧州の労働運動と社会主義運動について真剣に考察をくわえて、１９２１年暮から１９２２年春のころ世界革命における中国革命の責任を認識したばかりでなく、中国革命の正しい道を探求するために努力を始めた。欧州における労働運動や各種の主義思想などを考察して、共産革命だけが中国を救い、世界を救うのだという結論に達した。

一九二三年三月、彼は国内覚悟社の戦友に手紙を書いて、中国の革命問題について根本の

指導的思想を明確に提示した:我々は共産主義の原理および階級革命と無産階級専制これら二大原則を確信するとき、革命を実行する。ただし実行の手段は、その時の状況、その地の状況を考慮して決める。

仏国で勤工倹学する青年たちはみな自らの双手をもって、疲弊衰弱した祖国を救いたいと思った。彼らの内大部分の人は当初“救う”の意味をこう理解した：実業救国（産業商業を盛んにする）、と科学救国（学問科学の水準を高める）のため有用な人材になる。どうしたら本当に中国を救うことができるのか、彼らは思想的にはまだよく分からなかった。リヨン中仏大学事件の前はみなこのように思っていた。しかし求学闘争の教訓から少数の先進分子や進歩的団体が形成されてきた。社会主義革命の思想は広範な勤工倹学生たちの中に発展してきた。この過程で蔡和森、趙世炎たちが先頭にたって共産主義組織を成立させる努力を始めた。

蔡和森と新民学会の戦友十数名はモンタルジ公学を活動の中心にした。蔡和森、向警予（女性）、蔡暢たちはここに暮らしていた。蔡和森と向警予はすなわちここの梧桐樹林の中で結婚式を挙げた。彼らは革命理論を研究するためにともに協力して精力を注いだ。とくに蔡和森は手にする一冊の字書をたよりにたくさんの（仏語）新聞を読んで情報を収集し、『共産党宣言』、『社会主義の空想から科学への発展』、『国家と革命』などをみんなに紹介した。

リヨン中仏大学事件以前は、社会主義革命の思想をもつ人はごく少数であったが、リヨン事件以後は多くの勤工倹学生の思想は劇的に変化した。彼らはこう考えた：なぜいまの社会條件下で、我々は学習する権利をみな奪われるのか？　社会の現実は彼らに、反動勢力の迫害、そればかりでなく勤工倹学生の生存までも危うい状況にいたったことを認識させた。もとは工業を学び、農業を学び、医学を学び、それぞれの分野で高度な学問を修得して国家のために奉仕したいと考えていた彼らは、しだいに頭脳が目覚めてきた。もしこういう状況に安んじていたなら、資本主義制度下の牛馬になるしかなく、ほかの道はありえない、と。

社会はおおきな教室である。社会における不平、現実の教育は、彼ら青年たちに「実業救国」、「科学救国」の幻夢から目覚めさせ、多くの勤工倹学生たちに社会主義革命の思想を烈火のごとく燃焼させた。

中国共産党旅欧組織の形成は、中共旅仏小組から中共旅欧支部という発展過程を経た。一九二一年春季、旅欧華人の中にすでにひとつ秘密の中国共産党小組が形成されていた。最初、この小組成員に張申府、劉清揚（女性）、周恩来、趙世炎、陳公培が含まれていた。一九二一年七月、国内（上海）で開催された中国共産党第一回代表大会のとき、仏国小組は国内と連絡をとっていなかったので、代表を出席させることはなかった。

だが中共旅仏小組は実体のある組織になっていた。陳公培はリヨン事件の闘争に参加したため強制帰国させられていたが、その他の成員はみなしっかり活動していた。彼らはみな協力してマルクス主義理論の学習に精力をそそぎ、たがいに連絡を密にし、不定期ではあったがときどき会合をもった。この小組ははじめから、自分たちは共産党の組織であることを明確に認識していた。これ以外の名称はなかったし、何かのおおきな組織の部分であることもなかった。組織や成員の状況に関してはしっかり秘密を保持した。この点は、国内にあった組織とほぼ同様であった。

中共「一大」が開催されたのち、旅仏小組は中央から通知を得て、統一的中国共産党が誕生したことを知った。このときから、彼らは統一的中国共産党の組成部分になった。国内で秘密出版されていた月刊『共産党』などもひんぱんに彼らに送られてきた。中共旅仏小組と国内の党組織は関係は密になった。

一九二二年春季、旅欧党組織に新しい発展がみえた、つまり新しい党組織 - 中共旅独（ドイツ）小組ができたのだ。この年二月、三月、周恩来、張申府、劉清揚たちがあい継いでフランスからドイツベルリンに越してきた。彼らは、すでにドイツにいた中共党員の張伯簡（もと旅仏勤工倹学生）と会合して、中共旅独小組を組織した。

新しく国内からドイツに来た党員李季も旅独小組の活動に参加した。このように旅欧の中共党員はフランス一国からドイツを加え二国に発展し人員も十人になった。これについて一九二二年六月三十日、中共中央執行委員会書記・陳独秀は第三共産主義インターナショナルに提出した報告の中で明確に記述した“中共党員は仏国に二人、独国に八人いる。”

当時の組織規程にしたがって、党員の人数が少ないときは党の基層となる支部を成立させることはできなかった。そこで「通信員」という資格で中央と関係を保持した。旅欧党組織は張申府と趙世炎をそれぞれ駐独と駐仏の通信員とした。この時期、旅欧党組織の内部活動は以前にくらべていちじるしく進歩した。しだいにかたちが整ってきたばかりでなく、日常の会合や学習などの活動も定期的に行われるようになった。

一九二二年暮、旅仏、旅独の中共党員は統一的に中国共産党旅欧支部を成立させた。その翌年春、ベルギーにいた勤工倹学生の中からも中共党員になるものが数人でた。こうして旅欧華人が共産主義運動を発展させるための状況はますます有利になった。

統一的旅欧中国青年共産主義組織を建設するために、旅欧党組織は一九二一年暮にはもう準備をはじめていた。当時、この工作はおもに周恩来と趙世炎が責任者となって進められた。彼らはリヨン事件が失敗したあと、勤工倹学界において空前規模の新しい連合と新しい覚醒が生れた状況を十分に利用して、先進的青年たちに“勤工倹学生の中に厳格な共産主義組織をひとつ設立させる必要性”（李維漢「回憶新民学会」１９７９年）を理解してもらうに好都合な形勢にある、と認識した。そして有効な手順によって活動を始めた。一九二一年暮（あるいは一九二二年初）に彼ら二人は、工学世界社の主要な責任者である李維漢にパリのあるホテルに来てもらって会談を行った。旅欧中国青年共産主義組織を共同で統一する活動に関して協議をおこなったのである。そして各自それぞれ、その居住する地区や周囲にいる華人にはたらきかけて、準備活動に入った。

周恩来と趙世炎は、苦労の多い活動を精力的におこなった。周はいつも仏国と独国の間を行き来して旅欧党組織についての考え方を伝え、また各地にいる先進的青年の中でしょっちゅう報告会を開き、革命的覚悟を啓発した。彼の該博な学識と精緻な論述は、参加者に感銘をあたえ、敬服の念を生じさせた。

李卓然は当時の一場面を昨日のことのごとく回想した。

「少年共産党」がまだ成立していない時期、気候がもう暑くなりはじめたころであった。彼（周）はベルリンからパリに来て一軒のカフェ（地名ブラスパリ）で報告会を開いた。会に集まった人は百人ばかり。彼は一時間ちかく話した。内容は国際および国内の情勢だ。我々

は当時、彼が伍豪と称し、ベルリンから来た人というふうに認識していた。

張申府や劉清揚（女性）も組織成立のために少なからざる努力をした人物である。趙世炎は一九二二年四月三十日、陳公培にあてた手紙でこう書いた：張申府、劉清揚は以前ベルリンで周恩来、張伯簡、肖三たちと話して、全欧大組織すなわち青年団を成立させること、そして五月一日に成立させようと促したことがある、と自分（趙世炎）に書いて知らせた。

趙世炎はさらに語った：団を結成するためのことで、張申府といつも手紙のやりとりをしている。ただ彼は仏国は危険がおおいので慎重にこっそり進めている、だから進展はひじょうにおそいので、いつも彼から責められ促されている。

この他、張申府はよく国内と通信を密にし組織に関する協議を行っていた。たとえば近く誕生する旅欧の団組織が代表を、ロシアで開かれる第三インターの第四次大会（一九二二年十一月五日～十二月五日）に派遣できないかどうかについて２、３回国内と通信した（一九二二年四月二十二日、趙世炎が李立三にあてた手紙による）。

これで分かるように、統一的旅欧青年共産主義組織を設立するために旅欧党組織の成員はたがいに意見をかわし交流して、連携はそうとう緊密であった。

一九二二年五月になると、条件がよく適合する人として彼らが選んだ先進的青年は三十人以上になった。そのうち在仏は二十余人、在独は七、八人、在ベルギーは六，七人である。

上述のごとき準備をへて、統一的旅欧青年共産主義組織を設立する條件は成熟してきた。そこで一九二二年六月三日、第一回代表大会を開催した。参加した代表はぜんぶで十八人。そのうち、旅独代表は周恩来、旅仏勤工倹学生代表は趙世炎、李維漢、王若飛、肖三、肖朴生、傅鐘、鄭超麟、尹寛、任卓宣など、旅ベルギー学生代表は劉伯堅などであった。会場はパリ西郊にあるブーローニュの森のちいさな空地にある野外カフェテラスに選ばれた。カフェテラスの主人はフランス老夫人で、彼女は中国人学生たちに十八脚の椅子を用意してくれた。身を米黄色の大衣でつつんだ周恩来は、場所の選定と装飾など何もない会場にとても満足してこう述べた：これはなかなか好い、もし外から誰か来たとき、口をとじて声をださない、そうすれば、誰だって我々が何をしているか、わからない。

まず趙世炎が代表たちにむかって、準備経緯およびこの会の重要意義について報告した。ついで周恩来が自分で起草した組織章程を報告し、そのあと討議をおこなった。会は三日おこなわれ、以下のことが決定された：統一的中国青年共産主義組織を「旅欧中国少年共産党」と命名し、その指導機構を「旅欧中国少年共産党中央執行委員会」と称する。そして選挙によって趙世炎を総書記、周恩来を宣伝責任者、李維漢を組織責任者に選出した。執行委員会事務所はパリ市十三区イタリア広場近くにあるゴドフロワ街１８番地の小さなホテル内に設けられた。

一九二二年十月、旅欧少共は第一回成員全体による総投票で一致して、国内の社会主義青年団に加入することに同意した。そして十一月に李維漢を帰国させ団の全国代表大会に出席させた。さらに旅欧少共の代表として、中国社会主義青年団に組織として加入することを要求し、この件で団中央と協議した。この年暮、国内ではすでに党団の代表団をモスクワに派遣し第三インター（コミンテルン）第四次大会と少年共産国際第三次大会に出席させたことを知った。そこで旅欧少共もまた陳独秀、劉仁静に手紙を書いて、再度その意志を表明した。

まもなく旅欧少共は前後して、中国代表団と国内党中央からの指示を受けとった。それは名称を変えることおよび、中国社会主義青年団に加入したいという要求に同意する、という内容だった。

一九二三年二月十七日‐二十日、旅欧少共はパリ西門外の小さい村にある講堂で臨時代表大会をひらいた。４２人が７２名の団員を代表して出席した。会議で一致して決定した：旅欧少共は中国社会主義青年団の「旅欧の部」であり、正式名称を「旅欧中国共産主義青年団」とし、指導機構は旅欧中国共産主義青年団執行委員会とする。また趙世炎等十二人をちかくモスクワに送って学習させることにした。そこで指導機構を改選することになり、周恩来は執行委員会書記に、肖朴生ら四人を委員に選んだ。

中国社会主義青年団の重要構成部分として旅欧共青団は広範な勤工倹学生と旅欧華人の中で積極的に活動した。彼らの日常の活動はおもに、共産主義研究会を立ち上げ、専門的に内部訓練を行うことだ（活動幹部の養成）。中心的内容はマルクス主義理論を組織的に学習し、共産主義の教育を強化する。また学生運動委員会を設立し、もっぱら勤工倹学生に対する工作に責任をもつ。その主要任務は勤工倹学生の総団結を維持すること。そしてとくに主義を宣伝し同志を吸収することに注意をはらう。（周恩来「旅欧中国共産主義青年団〈中国社会主義青年団旅欧之部〉報告」第一号）さらに華工運動委員会を設立し、対華工工作をおこなう。日常活動は、統一的華工総会を成立させるための準備、華工間の団結を増進し
華工夜学、華工倶楽部を開設し、報告会や講演会を開催する。目的は華工大衆の階級意識を高め、さらにその中から優秀分子を選んで党団組織の中に吸収することだ。また出版委員会を設立し、編集、印刷と党団組織の内部通信と機関刊行物の発行に責任をもつ。

旅欧団の組織が設立されて以降、旅欧の党員は、年齢の高い少数を除いて一般に団員の身分をもって団の日常の活動に参加した。ただし彼らはけっして団と党を混同していなかった、また明確に切り離すこともしなかった。合するところもありまた離れるところもあり、団は党によって指導された。組織上で党は団に対し指導を行使する体制を確立する。これは旅欧の党と団の組織にとって、相互の関係を処理する方面における大きな成功であった、そして価値ある創造であった。

歴史的要因により、中国でも世界でもその共産主義運動の中で共産党と共青団の関係をどう扱うかは、当時どこでも重要かつ困難な課題であった。中国では、団は党の「政治上の指導」を受け入れることが一般的に確立していただけで組織上で同時に「指導」と「被指導」の関係が確立していたのではなかったから、「政治上の指導」を実際どのように運用実施するかについて困難があった。そのため、共産主義組織の団結と共産主義運動の発展にとって問題であった。旅欧共産主義者はこの普遍的問題について深刻に考察し、条文を明確にさだめて、問題を解決しなくてはならないと考えた。そして解決の方法を提示し、率先して実行にうつした。その具体的方法：党組織は青年党員二人を選んで団組織に派遣しその指導成員とし、組織面から、党の団に対する政治上の指導を保証する。

彼らはこう言った：

我々は中国共産党と青年団の間の「従属と親密」の関係を明白に表面化したいと望んだので、この方法を採用する必要があった。（『先駆』第２４号、一九二三年八月一日）

こういう体制を採用することによって党が政治、思想、組織面において団に対する指導を形成し、党の路線、方針および政策を、団の組織と広範な団員の行動の中で実行を着実に貫徹させることが可能となる。

団はかなり公開性があり、大衆基盤は広範であるので、秘密状態にある党組織の意図を団の名義で公開的に宣伝できるし実行できる。こうして影響を拡大しより良い効果をあげることができる。党は団を通して、勤工倹学生を主体とする旅欧青年中で工作を進め青年の特徴に適合する活動を進めるうえで便利である。これに加えて、団員は人数は多く、分布はひろいので、党と団が組織上で緊密に連携すれば、工作の効果はとても大きくなる。よって組織建設の上で、旅欧共青団は全国的にみて先進的なものであったと賞賛してよい。

一九二三年二月以降、周恩来は趙世炎の仕事を引き継いだ。彼はゴトフロワ街１７号の小ホテル三階の１６号室に住んだ。扉はせまく、面積は四、五平方メートルしかなく、そこに一つのシングルベッドと小さな木製椅子があるだけで、あとわずかに立錐の余地あるのみ。こういう條件のなかで、小部屋の灯光はいつも夜を徹してきえることはなかった。彼はあるいは読書学習に、あるいは奮筆著述に没頭した。これ以外に、彼は毎週一定の時間を確保し、活動基盤にはいってゆき、基盤組織の活動に参加した。さらに党団員をひきいて、無政府主義派、国家主義派との対面的闘争（論争）を指導した。（後述）

資 料

『郭沫若書信集』上　中国社会科学出版社１９９２
王永祥、孔繁豊、劉品青『中国共産党旅欧支部史話』中国青年出版社１９８５

◎ 旅欧共产主义小组成员张申府（左一）、刘清扬（左二）、周恩来（左三）与赵光宸的合影

◎ 里昂中法大学校门

◎ 里昂中法大学学生宿舍

赵世炎

◎ 向警予

左上：旅欧共産主義小組の主要成員
　　左から張申府、劉清揚、周恩来、趙光宸
右上：リヨン中法大学校門
中段：リヨン中法大学学生宿舎
下段左：趙世炎
下段右：向警予（1895 - 1928）
　1919 年、新民学会に加入。
　1921 年暮れ、フランスから帰国。
　1925 年 10 月、ソ連へ行って学習。
　1928 年、反共勢力によって殺害された。
（趙世炎は『中国共産党旅欧支部史話』、
　　他はみな『赤光』より）

郭沫若を発見したのは郭虞裳かそれとも宗白華か？

廖 久 明
（四川省楽山市楽山師範大学郭沫若研究センター）

翻訳　岩佐 昌暲

[要旨】：郭沫若が〈学灯〉に詩作品を発表し始めた時期、編集担当者は郭虞裳と宗白華の二人だった。そのため、郭沫若研究者の中には虞裳が郭沫若を発見したと考える人たちと、宗白華が郭沫若を発見したと考える人たちとがいる。この問題については、〈学灯〉の通訊欄に掲載された短い通信に基づいて、（一）宗白華が編集を引き継いだのは 1919 年 11 月 19 日であり、それ以前は〈学灯〉の編集に関わっていなかった。（二）宗白華が編集を引き継いだ後（も）、郭虞裳は編集に関わったが、それは 1920 年 1 月初旬までだった、という二つの事実が見出せる。また、宗白華が編集を引き継ぐ前に、郭沫若はすでに〈学灯〉に 13 篇の詩を発表していた。以上の事実から、郭沫若を最初に見出したのは宗白華ではなく郭虞裳である、という結論を確実に導くことができる。

[キーワード]: 郭沫若; 郭虞裳; 宗白華; 発見

はし書き

《女神》は中国近代文学史上で最も重要な詩集であり、収録作品の大多数は中華民国の四大副刊の一つである〈学灯〉に掲載された。当時、郭虞裳と宗白華らが前後して編集者を務めていた。このため、詩人・郭沫若を最初に見出したのは一体誰なのかが、人々の注目する話題となっていた。本稿はこれについて考察をおこなうものである。

本稿は 2019 年度国家社会科学基金項目「民国時期郭沫若研究資料の収集・整理と研究」（証書番号 19BZW101）の段階的成果。原題「到底是郭虞裳还是宗白华发现了郭沫若」『現代中国文学研究叢刊』2024 年第 3 号に掲載（発表後、若干修正）の日本語訳である。

I. 他者の視点

最も早く正式にこの問題を提起したのは楽斉だったと言うべきだろう。 彼はこう述べた。「郭沫若が初めて〈学灯〉に寄稿したとき、〈学灯〉は郭虞裳が編集していた」「適切な言い方をすれば、最初に郭沫若を目にとめ、彼の処女作を発表し、彼を〈文芸の新潮流〉に引き入れたのは郭虞裳だった。これに続き、郭沫若の〈詩的興奮を熱狂的なまでに煽った〉のが宗白華であった」[1]

この文を読んで、鄒士方が《第一個発表郭沫若新詩的是宗白華(郭沫若の新詩を最初に発表したのは宗白華である)》を書いた。その中で「私はここ数年、出版社の求めに応じ宗白華先生の伝記を書いており、《時事新報・学灯》1919 年版の後半年の紙面を調べ、また白華先生ご本人とも何度も話をした。収集した資料から見て、郭沫若の詩を最初に掲載したのは当然宗白華に違いなく、郭虞裳ではない、と私は今でも考えている」「正確に言えば、郭沫若が最初に〈学灯〉に投稿したときは、〈学灯〉は郭虞裳と宗白華が共同で編集していたが、その中の〈新文芸〉欄は宗白華が直接責任を負っていた。つまり、数ある投稿から郭沫若の作品を最初に見出し、抜き出して、最初に発表したのは宗白華だったのである」[2] と書き、また、《宗白華評伝》の、〈文壇の〈伯楽〉〉の章でこう書いている。「ちょうど〈学灯〉があらたに〈新文芸〉欄を開設して間もなく、宗白華は大量の投稿の中から美しい文字で書かれた日本からの原稿を見つけ、若い留学生のロマンチックな熱情に深く心を動かされた。〈沫若〉という名前は見知らぬものだったが、だからといって作品の実際の価値を軽んじることはなかった。彼はすぐにこの原稿を郭虞裳に推薦し、掲載するよう極力主張した。間もなく、〈沫若〉署名の白話詩《鷺鷥(鷺(さぎ))》と《抱和児浴博多湾中（和児を抱いて博多湾で水浴びする)》が〈学灯〉1919 年 9 月 11 日号に発表された」[3]

1984 年 4 月 24 日、諸天寅が宗白華訪問記を発表、その中で、宗白華こそ郭沫若を発見した〈文壇の伯楽〉だと書いた。「1919 年、郭沫若は日本に留学していた頃、しばしば国内に詩を送っていた。最も早く発表された彼の二篇の詩《抱和児浴博多湾中》と《鷺鷥》は、上

海《時事新報》の文芸副刊[付録]〈学灯〉に掲載されたもので、最初に郭沫若を発見した伯楽は宗白華先生である」[4]。 同年 5 月 29 日午前、諸天寅は郭沫若との交流関係について再び宗白華を訪ねた。その整理原稿の一部には以下のような文がある。

「1919 年 8 月初旬、《時事新報》総編集長［总编辑］の張東蓀がやってきて、郭虞裳の〈学灯〉編集を手伝ってほしいと言った。当時私(宗白華)はようやく 22 歳になったばかりだった。私は新詩［白話現代詩］が好きだったので、〈学灯〉の編集に加わってから、特別に〈新文芸〉という欄を増設した。当時、私も新詩を書いていて、8 月 30 日、私の詩《向祖国（祖国に)》をこのコーナーに発表した。当時、〈学灯〉の主編［原文も〈主编〉。〈編集長〉あるいは〈編集責任者〉の両方に訳せるが、本訳ではすべて〈主編〉と表記する］だった郭虞裳は新文学［五四運動後に勃興した新しい思潮に基づく白話文学］のことをあまりよく分かっていなかった。そのため、新文学の原稿がたくさん積まれたままになっていた。滞留していた原稿を見て行くうち、日本の福岡から送られてきた郭沫若の新詩が目に入った。私は、その詩が大胆で、奔放で、型にはまらず、火山が爆発するような激情に満ちているのを感じ、深く感動した。私は自分が一人の抒情の天才、詩を書く天才を発見したと思った。これをきっかけに私は、彼が送ってきた詩を非常に重視するようになった。だから、《女神》の詩のほとんどは私が編集して掲載したものだ。有名な《鳳凰涅槃》のように、〈学灯〉に 2 日連続で見開き 1 ページで掲載され、当時としては前例のない、記録破りの、壮挙と言って好い初めての紙面作りとなったものもある」[5]。

調査によれば、鄒士方、諸天寅、宗白華の見方に影響されたかどうかは分らないが、多くの人が宗白華が郭沫若を発見したと考えている [6]。筆者も当時は同じ考えであった。つまり「郭沫若が〈学灯〉に投じた詩が発表できたのは、本物を見抜く宗白華の慧眼があったからだ」と考えていたのである [7]。

再度、この考えに異論を唱えたのは姜涛だった。彼は主張した。

郭沫若が〈学灯〉に投稿したのは1919年9月である。すでに宗白華は〈学灯〉の編集に関わっていたが、主にまだ補助的な役割で、正式に引き継いだのは11月中旬だった。9月の時点では、宗白華の前任者である郭虞裳が依然として〈学灯〉の主な編集者であり、郭沫若の詩を最初に掲載したのも郭虞裳であった。〈学灯〉の〈新文芸〉欄を細かく見てみると、この年の9月には15篇の新詩が発表され、そのうち郭の詩は2篇であった。10月には23篇の詩が発表されたが、郭の詩はすでに9篇に達しており、まるで郭の詩がすでに〈新文芸〉欄の主力となっているかのようである。このことは、郭虞裳の在任中、郭の詩が一回で大きな成功を収めただけでなく、その後の作品も比較的好評だったことを物語っている[8]。

張黎敏はこの意見に反対している。理由は以下のようである。

確かに、郭沫若が1919年9月11日に初めて〈学灯〉に新詩を発表したとき、郭虞裳は〈学灯〉は主編であり、郭沫若を発見する客観的条件をすべて備えていた。だが、比較して言えば、宗白華の方にはそれ以上に直接的な客観的条件があった。なぜなら、この時、彼は〈学灯〉編集部で働き、郭虞裳を補佐して具体的な編集業務を処理していただけでなく、8月15日にはさらに〈学灯〉に自分の責任で書いた啓事〔新聞や雑誌に載る「お知らせ」の類〕を発表していたからである。

一般的に言えば、新聞・雑誌の啓事の性質は〈服務作品〉[行政機関、企業、団体等のために個人または集団が創作した作品]の範疇に属し、その所有権は〈新聞、雑誌の出版社〉に属する。だが、この啓事の著作権は〈宗白華〉に属すのであり、だから《宗白華全集》にも全文が収録されている。事実によって明らかなことだが、〈新文芸〉欄は宗白華が具体的に企画し、責任を持って作品を発表していたコラム欄である。副刊の編集者の分業と協力の原則によると、副刊は（種々の、ジャンルの）異なるコラムで構成されるが、ある一つのコラムの編集者は実際にそのコラムの責任者であり、

コラムの主題、原稿の審査基準および、原稿の執筆依頼、原稿の採用の可否、校閲から最終的なコラムを書くための資料の提供［供稿］等の全過程に一定の責任を負う。だから、宗白華はこう言っている。「私は《時事新報》副刊〈学灯〉の編集者である郭虞裳の招きに応じ、彼に代わって〈学灯〉の編集を担当することになった。私が〈学灯〉の主編をしていた 1 年間は、毎日夕食後に新聞社に行って投稿原稿を読んでいた」。話されているのは実際の状況であって、空っぽの穴から吹いてきた風［実体のない噂］ではない。だから、郭沫若は宗白華が編集していた〈新文芸〉欄の投稿原稿の中から見出されたと言うのも、やはり情理にかなった推断なのである[9]。

筆者から見ると、上の記述には検討の余地がある。まず、《宗白華全集》の出版説明から分かることだが、《宗白華全集》に〈学灯〉のこの〈啓事〉を収録したのは、全集の整理者のやったことである。「出版説明」にはこう書かれている。「《宗白華全集》は四巻に分かれ、第一巻、第二巻、第三巻には宗先生の著作を収録し、第四巻には先生の翻訳を収めている。著作部分に収めた文章のほとんどは、もともと宗先生の講義原稿と筆記［ノート、メモ、随筆、随感など］であり、この度、それを整理し、注釈をつけ、集にまとめ、はじめて出版したものである」（「出版説明」）。この説明は、〈啓事〉を《全集》に収録したのは、宗白華自身の意図ではないこと、つまり、整理者がおそらく誤って他人の〈服務作品〉を宗白華の著作として収録した可能性を示唆しており、したがって、この啓事は「〈新文芸〉欄は宗白華が具体的に企画し、責任を持っていた」ということを証明することはできない。

第二に、仮に宗白華が確かにこの啓事を書いたとしても、彼の記憶を基に「郭沫若は宗白華が編集していた〈新文芸〉欄の投稿原稿の中から見出された」と推断することはできない。なぜなら、宗白華はただ編集をしていただけで、郭虞裳の〈学灯〉編集を手伝っていたのではないからだ。宗白華が〈学灯〉の編集をしていた期間、彼は「毎日夕食後に新聞社に行って投稿原稿を読んでいた」のである。

II.筆者の考証

以上の考察から、郭沫若を発見したのは一体誰なのかを明らかにしようとするには、宗白華がいつ〈学灯〉の編集に関わっていたのかを明かにするのが最も肝心な問題であることがわかる。宗白華は陳明遠のインタビューを受けた時こう語っている：

> その年の 9 月、《時事新報》の張東蓀総編集長［总编辑］が会いに来て、私を招聘し、虞裳に替えて同紙の文芸欄〈学灯〉の主編を担当させたいと言った……。 この郭虞裳という人は元《時事新報》の総経理［社長］で、管理と経営には長じているが、文筆は得意ではなかった [10]。

陳明遠のインタビュー記事を見た鄒士方は、自分は「この 3 年来、宗白華先生の伝記を書いている最中で、何度も先生と長時間の話をし、1919 年下半期の《時事新報》も調査した」と強調しつつ、上記の引用文を 3 点修正している。その第 1 点はこうである。

> 《時事新報》の責任者であった張東蓀が宗白華を招聘し〈学灯〉の編集者に就けたのは、1919 年 8 月初旬のことで、9 月ではなかった。宗白華が〈学灯〉を編集していた時、郭虞裳は依然として〈学灯〉の主編であり続け、その年の 11 月中旬になってはじめて宗白華は郭虞裳に代って主編になったのだ（この時、郭は留学のためイギリスに行った）。1919 年 11 月 18 日の〈学灯〉に、郭虞裳の沈雁冰宛ての手紙が載っているが、その末尾に「この数日、やることが多すぎます。頑張ってはいますがが、やはり忙しくて全部はやりきれません。〈学灯〉の編集者のことですが、今は私の最も敬服する友人、宗白華氏にお願いして私に代ってもらうことが決まっています。〈学灯〉は将来、必ず輝きを増すでしょう」とある。これは十分な証拠になる。宗白華は〈学灯〉に来た初めは主編ではなかったが、すでに大きな役割を発揮し始めていた。彼が〈学灯〉に来て最初に行ったのは、〈新文芸〉欄を増設することだった。この欄は開設後ずっと彼が責任

をもって編集した。この欄は主に新詩を掲載した。8 月 30 日には宗白華が自作の《向祖国》を発表、9 月 11 日には郭沫若の《博多湾抱和児浴水》と《鷺》を掲載した。[11]

これについて以下に筆者の考えを述べる。

まず第一に、鄒士方の修正はわれわれに一つの事実、即ち、いかなる人の回想も、真偽を識別せずに信じてはならない、ということを教えてくれる。

次に、〈学灯〉に掲載された郭虞裳の沈雁冰宛て手紙からは、「宗白華は〈学灯〉に来た初めは主編ではなかったが、すでに大きな役割を発揮し始めて」おり、「〈学灯〉は将来必ず輝きをます」ということを証明できない。証明できないだけでなく、逆に、宗白華が 1919 年 11 月 18 日以降になってはじめて、「大きな役割を果たした」ということを説明することになっている。

第三に、「彼が〈学灯〉に来て最初におこなったのは、〈新文芸〉欄を増設することだった。この欄は設立後ずっと彼が責任をもった」ということだが、8 月 15 日に〈学灯〉に掲載された《啓事》であれ、宗白華の回想であれ、この記述の根拠とするには、いずれも説得力に欠ける。なぜなら 11 月 18 日の〈学灯〉に掲載された郭虞裳の沈雁冰宛の手紙が非常にはっきりと書いているように「〈学灯〉の編集のことは、現在、私の最も敬愛する友人である宗白華氏に代行してもらうことに決まっており、〈学灯〉は今後、輝きを増すだろう」からである。

では、宗白華が学灯の編集者の任を引き継いだのは一体いつなのか。中華民国時代、編集者たちはしばしば新聞の通訊欄に短い通信を発表し、関連する状況を執筆者や読者に知らせていた。われわれは〈学灯〉に掲載されたこの類の通信を通して、宗白華が編集業務に携わったおおよその時期および関連する状況を判断することができる。筆者は 1919 年 7 月 20 日から 1920 年 2 月 15 日（手元の資料では、1919 年 9 月 1 日から 10 日、11 月 8 日と 26 日、1920 年 1 月 2 日と 2 月 16 日から 22 日は欠号である）までの〈学灯〉を通覧した結果、

宗白華（署名は〈華〉）が初めてこの類の通信を通訊欄に掲載したのは 1919 年 11 月 19 日であることを発見した。いま、宗白華と郭虞裳（〈虞〉または〈虞裳〉と署名）が 1919 年 11 月 19 日から 1920 年 2 月 15 日までに通訊欄に掲載したこの類の通信の数を数えてみると、以下のようであった。宗白華（〈華〉と署名）括弧内の数字は、同じ日に発表した通信の回数である。1919 年 11 月 19 日、12 月 3 日、12 月 6 日、12 月 8 日（2）、12 月 13 日、12 月 16 日、12 月 17 日、12 月 22 日、12 月 25 日、12 月 26 日、1920 年 1 月 7 日、1 月 12 日（3）、1 月 17 日、1 月 20 日、1 月 24 日（2）、1 月 26 日、1 月 31 日（3）、2 月 4 日、2 月 5 日、2 月 8 日、郭虞裳（〈虞〉または〈虞裳〉と署名） 1919 年 11 月 30 日、12 月 8 日、12 月 22 日、1920 年 1 月 3 日、1 月 7 日。

以上の整理を根拠にすれば、以下の結論を確実に導き出すことができる。（宗白華の〈学灯〉編集者就任に関して挙げられている前述のさまざまな日時のうち）この類の通信を発表した最初の日から数えたとしても、彼が編集者の任を引き継いだのは（最も早くて）1919 年 11 月 19 日であり、それ以前は〈学灯〉の編集業務に関わっていなかった、

ここで、この期間に郭虞裳が発表したこの類の短い通信を整理してみよう。

1919 年 11 月 30 日付「天中君ご高覧下さい：《略史》は非常に良いです。ただ本欄には滞留の原稿がまだ沢山あり、当面この種の長文を掲載するのは絶対に困難です。どうぞ送らないで下さい。ご返事まで」

1919 年 12 月 8 日付「一岑君ご高覧下さい：二度もお出で下さったのに、お会いできず、申訳ありません。近日の夕方、必ず社におります。ご来駕下さりお話しするのをお待ちしております」

1919 年 12 月 22 日付「楽琴先生：東蓀先生は蘇州に行きました。あなたが彼への手紙にお書きになった、社会主義、新しい村、協社[協会]、女性の解放、等々は大変簡明ですが、私はすべて賛成です。/あなたは経済学会を組織し、《経済評論》を発行したいと考えていま

す。これは非常に良いことです。7、8 年前、私も同じ考えを持っており、経済学を学んでいる数人の友人たちと、(それについて) まあ何度も話しています。しかし、同志が少なく、散らばっていて集まっていないので、今になってもまだ着手できていません。私が思いますに、漠然とした文化運動や、中身のない学術団体でも、知的に幼稚な社会では、かなりの地位を有していますが、重要性は専門学者の専門別の学会や集まりにはどうしたって及びません。学術界が今後に求めるのは、こういう専門的な結びつきだと思います。あなたはそれを実現できる方法がおありですか？/フランス人ジール著《経済学》を訳すとおっしゃっていましたが、もう終わりましたか？原書からの翻訳ですか？原書の第 16 版から翻訳したのですか？出版の方法は、あなたのお役に立つつもりがあります。まずはお訳しになった例を説明してください」

1920 年 1 月 3 日付「楽琴先生：さきごろ、寧［南京］、皖［安徽］から上海に帰り、お手紙拝誦し、安心しました。今晩 5 時に社に来て、話をさせていただけませんか？翻訳と原作も、ついでにお持ちください。いかがでしょう？」

1920 年 1 月 7 日付「楽琴先生：東蓀先生は病気のため 3 日間来社されません。ご依頼の件、彼が出社した時に伝えます。日曜日に来書がすでに届いていますので、手がかりがつかめたら改めてお話します」

更に以下の資料を見てみよう。

11 月 20 日、〈学灯〉は沈雁冰と郭虞裳の往復書簡を発表した。郭虞裳は手紙の中で、「〈学灯〉の文芸方面に対するあなたのご意見に、私はとても感服しています。宗白華さんもあなたのこの手紙を見た時、やはりその通りだと言いました。ご都合のよろしい時に社にお出でくださり、宗さんとご相談ください。われわれはどうしても方法を考えわれわれの理想を実現しなければなりません」

11 月 23 日、〈青年倶楽部〉欄に、多くの人が個別に書いた「ある問題の討論」が掲載された。その前に〈華〉の署名で「編者のことば［原文：按語］」がおかれ「この度は投稿が多すぎ、すべてを掲載することができない。甚だ申し訳ない。また掲載した執筆者の文も、原文が長すぎるため、紙幅に限りがあり、全文を掲載することができず、要点のみを抜粋した。これもご諒解いただきたい」とあった。

以上の資料を結び付けると、二つの結論を得ることができる。

第一に、宗白華が編集を引き継いだのは 1919 年 11 月 19 日であり、それ以前は〈学灯〉の編集に参加していないことである[12]。第二に、宗白華が編集を引き継いだ後、郭虞裳が 1920 年 1 月初旬まで編集作業に参加していたことである。この 2 点が立証されれば、《宗白華全集》第 1 巻に収録された以下の〈職務作品〉、つまり、《〈学灯〉啓事》（8 月 15 日、39 頁）、《復知東君（知東君への返信）》（10 月 30 日、87 頁）、《本欄啓事》（11 月 10 日、91 頁）、《致柢純函（柢純への手紙）》（11 月 22 日、108 頁）、は収録すべきではなかった作品と結論づけることができる（カッコ内は〈職務作品〉が〈学灯〉に掲載された時期、ページ数は《宗白華全集》第 1 巻収録当時のページ数）[13]。

ここで、〈学灯〉が 1919 年 8 月 11 日に発した《改良本報的討論》（本紙改善のための討論）と題する〈通訊〉を見てみよう。少年中国学会会員の黄玄（仲蘇）が張東蓀に宛てた手紙で、そのなかに〈学灯〉に関する以下のような言及がある。

> 〈学灯〉には、思想が新しく優れていて、清純な文で書かれた小説や詩（美的傾向の作品）を、翻訳でも創作でも構わないから、毎日多く掲載することを望む。この種の文章は、最もよく読者の注意を惹きつけることができ（新しい考えを植え付ける効果は、他の種類の文章よりもはるかに勝っている）、かつ人々に精神的な喜びを与えることができる。

この手紙に張東蓀はこう答えている。

仲蘇先生

あなたのお便りに喩える言葉もないほど感激しました。以前何人かの友人に会い、やはり《時事新報》がいかに改善すべきかの教えを賜りました。彼らの厚意はもちろん十二分に頂戴しています。ですが、実際にはできないことも、どうしようもないこともあります。例えば、欧米に特派員を派遣し、もっぱら重要なニュースの電報を打たせるなど、こういう方法は莫大な費用がかかり、しばらくは考えられる方法もありません。したがって、改善は私たちの貧弱な能力の範囲内で行うつもりです。これが〈可能な改善〉です。今、先生のお手紙で私たちに改善を望んでおられるのは、どれも可能な範囲内のことであり、一面では、私たちに対するご指導であり、他方ではご理解であることが読み取れ、本当に私たちは非常に感激しています。《時事新報》は

ベターだとまで言う勇気はありませんが、常に真のベターに届きたいと思っております。ベストまでは、まだ及びませんが、われわれは、一方では必ずや学問の基盤を培い、他方ではまた必ずや手厚い財源を集めなければなりません。正に十年の後を期すのみであります。匆々、東蓀。

上記の〈通訊〉発表の 4 日後、つまり 8 月 15 日、〈学灯〉は《本欄啓事（本欄からのお知らせ)》を発表した。啓事にはこうある「本日より、本副刊は新たに〈新文芸〉欄を開設した。もし読者の投稿を頂けば、大いに歓迎する。ここにお知らせする」[14]。同日、〈新文芸〉は黄仲蘇の詩《重来上海（再び上海に来る)》を掲載した。

以上の事実から、次のように結論づけることができる。1919 年 8 月 15 日に〈学灯〉が《本欄啓事》を載せ、併せて〈新文芸〉欄を開設したのは、決して少年中国学会会員の宗白華が郭虞裳の〈学灯〉編集を手伝っていたためではなく、1919 年 8 月 11 日に〈学灯〉に掲載された少年中国学会会員の黄仲蘇からの手紙のためであった。

こうして、今、筆者は陳明遠のインタビュー原稿の中に「その年の 9 月、《時事新報》の張東蓀総編集長が私に会いに来て、私を招聘して、郭虞裳に替えて同紙の文芸欄〈学灯〉の編集者に任じたいと言った」という宗白華の発言がなぜ出て来たのかの理由を、確実に理解することができる。陳明遠はこのインタビューの冒頭にこう書いている。「1983 年の春から夏にかけて、私はしばしば宗白華先生を北京大学朗潤園第 10 公寓に訪ね、彼が語る過去の出来事の数々に耳を傾けた。宗老先生は今年 86 歳になるが、三十数年来、ずっと北京大学哲学科の教授を務め、今はすでに引退して自宅にいる。彼は現在、健康状態がよくない。視力も非常に悪く、文章を書くことができないので、この訪問記の執筆と完成を私に頼んだ」[15]。86 歳の老人に、60 年以上も前のことを正確に記憶していろというのは現実的ではない。書かれている内容から、陳明遠が訪問前に多くの準備をしていたことが知られる。郭沫若が〈学灯〉に最初に詩を発表した日時が 1919 年 9 月 11 日であることは、必ずや陳明遠が宗白華に伝えたにちがいない。そこで、宗白華は張東蓀が自分を招聘して〈学灯〉の主編に据えたのが 1919 年 9 月であったと推測したのだ。

同様に今、筆者は鄒士方の訂正原稿中に「《新時事新聞》の責任者であった張東蓀が宗白華を〈学灯〉の編集者に招聘したのは、1919 年 8 月初旬のことだった」という文が現れた理由も確実に理解できる。人はしばしば、自分が認めている人物を研究するとき、その人物の重要性を強調するのを好むという特徴がある。郭沫若は中国近代文学史上最も重要な詩人である。もし郭沫若を発見したのが宗白華だとすれば、宗白華は間違いなく伯楽である。鄒士方はこの〈先入観〉[原文：前見] を抱いて、1919 年下半期の《時事新報》を調べ、8 月 15 日に〈学灯〉が「新たに〈新文芸〉欄を開設」したという《本欄啓事》を発見したのだ。そこで、この啓事は宗白華が書いたものだと考えた。だとすれば「《時事新報》の責任者である張東蓀が宗白華を招聘して〈学灯〉の編集に当たらせたのは 1919 年 8 月初旬」だったというのは、非常に理にかなった推測となる。もしこのような啓事を手にして齢 80 歳を越

えた白華に聞けば、このような〈証拠〉を前に、宗白華が類似の回想をするというのも非常に正常なことである。

さて、筆者はさらに諸天寅の整理原稿中に以下の文が出現した原因も明らかにしよう。

「1919 年 8 月初旬、《時事新報》主編の張東蓀がやってきて、郭虞裳の〈学灯〉編集を手伝ってほしいと言った。(略) 私は新詩が好きだったので、〈学灯〉の編集に加わってから、特に新しく〈新文芸〉というコラム欄を増設した。当時、私も新詩を書いていて、8 月 30 日、私の詩《向祖国》がこのコーナーに掲載された」

諸天寅が宗白華を再訪した日時は 1984 年 5 月 29 日[16]だったが、この時、鄒士方の《第一个発表郭沫若新詩是宗白華—読《郭沫若与〈学灯〉》的一点質疑》が《光明日報》1983 年 10 月 22 日の第 4 版〈東風〉欄にすでに発表されていた。鄒士方の指摘を受け、宗白華はすでに、自分が郭虞裳を手伝って〈学灯〉の編集に従事していたのは 1918 年 8 月初旬のことで、〈新文芸〉欄は自分が開設したものだと、思い込んでいた。それで諸天寅が訪ねて来た時に、鄒士方が自分に知らせた内容を事実として相手に伝えたのである。

筆者はかつて先入観〉が日本と中国の学者の史料解釈に及ぼす重要な影響について指摘する二編の論文を書いたことがある [17]。だが、上に述べたことから知られるように、このような影響は国籍によって受ける・受けないの違いがあるわけではない。実際、絶対多数の学者が先入観の影響から免れないのであり、意識的にその影響を避けた一部の学者だけがより優れているということになる。劉海振が郭虞裳と宗白華の渡欧時期を考証した時、彼は〈先入観〉に影響されることなく、ただ《時事新報》〈学灯〉1919 年 11 月 18 日号に掲載された郭虞裳の沈雁冰宛て手紙だけに基づいて、「郭虞裳が主編の職を退いた時期は、確実に 1919 年 11 月だとまで絞り込むことができる」と述べた。かつ又、論文の冒頭には「周知のように」と書き、「周知のように、郭虞裳は 1919 年 7 月 26 日から 11 月 18 日までの期間《時事新報》の副刊〈学灯〉の主編を務め、彼の後を継いで〈学灯〉を主宰した宗白華は 1920 年

4 月 30 日まで働いていた」[18]と書いた。この事例は反面から、〈先入観〉が一個人に与える影響がいかに深刻かをわれわれに告げている！

最後に、宗白華が編集を引き継ぐ前に〈学灯〉に発表された（つまり宗白華ではなく、郭虞裳が掲載の決定に関わった可能性のある―訳者注）郭沫若の詩を見てみよう。括弧内は掲載日、いずれも 1919 年。《抱和児浴博多湾中》、《鷺鷥》（1919 年 9 月 11 日）、《死的誘惑（死の誘惑）》（9 月 29 日）、《新月（三日月）》、《白雲》（10 月 2 日、《女神》にはこの 2 編を統合して《新月与白雲》の題で収録）、《Faust 钞译(ファウスト抄訳)》（10 月 10 日）、《両対児女(二組の子供)》（10 月 18 日）、《某礼拝日（ある日曜日）》（10 月 20 日）、《夢》（10 月 22 日 [19], 10 月 10 日）、《火葬場》、《晩歩（夜の散歩）》（10 月 23 日）、《浴海（海水浴）》（10 月 24 日）、《黎明》（11 月 14 日）と、13 編にも及ぶ。

以上からこのような結論を確実に出していいだろう。郭虞裳こそが郭沫若を発見したのである、と。

翻訳について

1．本論文には、段落によって非常に長文のものが複数あった。拙訳では、読者の閲読の便宜を考え、著者の了解を得たうえで、複数のより短い段落に分割して表示した箇所がある。変更を承諾された廖久明教授に感謝し、併せて読者のご諒解を請う。また、翻訳の過程で、難解な表現について、武継平会員（公立大学法人福岡女子大学名誉教授）のご示教を受けた。ここに記して感謝の意を表したい。

2．文中、固有名詞のうち、書物、新聞・雑誌、論文、作品などは、括弧《》で括り、その下位の、新聞の副刊、書物や論文の章・節、引用されている単語（例えば原文で‘　’や“　”で括られているもの等）はすべて〈〉で括って示した。著者が「」で引用している文は「」で括った。

3．［　］で示したものは、その前にある語の説明である。ついでに言えば訳に困ったのが「编辑」と「主编」である。拙訳では、〈编辑〉を「編集者」と訳し、その後ろに［原文は〈编辑〉］という説明をくわえた。後者は中日辞書では「編集責任者」「編集長」の二つの訳語を与えている。拙訳では副刊の編集責任者に「編集長」という訳語を与えることに違和感があり、本論文中の〈主编〉はすべて「主編」とし、初出の語に、やや長い説明を加えた。〈主

编〉の日本語訳としてどういう語が適切か、また拙訳の処理方法が適切かどうか、訳者にはまだ確かな答えがない。関心ある読者のご教示をお願いする。ホームページの投稿欄で議論していただくことを希望する。

注釈

以下は著者が本論文に付した注である。以下の注では固有名詞（人名、書名、論文名、新聞・雑誌名など）は原則として中文簡体字を用い、その表記は、標点規則表記に従った

1．乐齐《郭沫若与〈学灯〉》（郭沫若と＜学灯＞）《光明日报》1983 年 8 月 27 日、4 頁、副刊〈東風〉。

2．邹士方「「第一个发表郭沫若新诗的是宗白华——读《郭沫若与〈学灯〉》的一点质疑」（郭沫若の新詩を最初に発表したのは宗白華だった——「郭沫若と〈学灯〉」を読んでのちょっとした疑問）」《光明日报》1983 年 10 月 22 日 4 頁、〈東風〉に掲載。また、宗白华口述、鄒仕方・趙遵堂整理《秋日谈往——回忆同郭沫若、田汉青年时期的友谊（秋のある日に既往を語る——郭沫若と田漢との青年期の友情の回想）《北京日報》1980 年 10 月 19 日、3 頁掲載も参照。

3．邹士方《宗白华评传（上）》西苑出版社、2013 年版、第 40 頁。《鹭鸶》は〈学灯〉発表の際、および《女神》に収載されるとき、いずれ《鹭鹚》と書かれていた。以下同じ。

4．诸天寅：《文坛伯乐——访最早发现郭沫若才华的宗白华教授》（文壇の伯楽——郭沫若の才能を最初に見出した宗白華教授を訪ねて），《北京晚报》1984 年 4 月 24 日第 1 版，《鹭丝》は《鹭鹚》に作るべきである。以下同じ。

5．宗白华：《忆郭沫若君》（郭沫若君の回想），《郭沫若研究》第 4 辑，文化艺术出版社 1988 年版，第 317 頁。《向祖国》（祖国に向かって）は、《问祖国》（祖国に問う）が正しい。以下同じ。

6．以下郭沫若と宗白華の伝記でこの観点をもつ書籍を挙げる。

1. 黄侯兴：《郭沫若》，人民出版社 1986 年版，第 26 頁。
2. 孙党伯：《郭沫若评传》，人民文学出版社 1987 年版，第 84-86 頁。
3. 秦川：《郭沫若评传》，重庆出版社 1993 年版，第 50-51 頁。
4. 王德胜：《宗白华评传》，商务印书馆 2001 年版，第 39-51 頁。
5. 魏红珊：《郭沫若》，四川人民出版社 2002 年版，第 46-48 頁。
6. 李斌：《女神之光：郭沫若传》，作家出版社 2018 年版，第 64 頁。

もっぱらこの問題を検討した以下の単著論文もやはりこの観点を取っている。

1. 王艳：《宗白华、郭沫若文缘寻踪》（宗白花と郭沫若の文縁の跡を辿る），《绥化学院学报》2009 年第 2 期。
2. 步武尘：《宗白华发现和扶植郭沫若》（宗白華が郭沫若を見出し、育て上げた），《世纪》2010 第 4 期。
3. 王艳、陈小妹：《生命诗学的深层律动——宗白华、郭沫若文缘关系比较》（生命の詩学の深層のリズム——宗白華と郭沫若の文縁の比較），《牡丹江大学学报》2010 年第 12 期。
4. 陈捷：《论〈学灯〉主编宗白华与郭沫若的新诗创作》（〈学灯〉主編宗白華と郭沫若の新詩創作），《南京理工大学学报（社会科学版）》 2020 年第 5 期。

郭沫若の叙述に基づいて彼の詩が〈学灯〉に発表されたときの状況を紹介していながら、この問題を強調していないのは、以下の 2 冊の伝記だけである。

1．冯望岳：《郭沫若的文学世界》，陕西人民出版社 1993 年版，第 51-52 頁。

2．刘茂林：《郭沫若传奇》，社会科学文献出版社 1994 年版，第 225 頁。

7．廖久明：《不一样的弃医，不一样的从文——鲁迅、郭沫若弃医从文比较论》（異なる医学の放棄、異なる文学の従事——魯迅・郭沫若の棄医従文比較論），《魯迅〈藤野先生〉探疑》（魯迅「藤野先生」疑問考），商务印书馆 2021 年版，第 161 頁。

8．姜涛：《"新诗集"与中国新诗的发生》（「新詩集」と中国新詩の発生），北京大学出版社 2005 年版，第 25 頁。

9．张黎敏：《文化传播与文学生长：1918-1923<时事新>研究》（文化の伝播と文学の成長），华东师范大学博士学位论文，2009 年 4 月 1 日，第 84 頁。

10. 陈明远：《宗白华谈田汉》（宗白華、田漢を語る），《新文学史料》1983 年第 4 期。

11. 邹士方：《对<宗白华谈田汉>的订正》（「宗白華談田漢」への訂正），《新文学史料》1984 年第 3 期。

12. 劉海珍は郭虞裳が 1919 年 11 月 18 日《時事新報》〈学灯〉に掲載された郭の沈雁冰信宛の手紙に基づき「郭虞裳が主編を辞した期日は 1919 年 11 月に確定できると断言した」刘海珍：《郭虞裳、宗白华赴欧时间新考》（郭虞裳、宗白華の渡欧時間の新考察），《现代中文学刊》2022 年第 5 期）

13. この手紙は《宗白华全集》第 1 巻（安徽教育出版社 1996 年版）に収録する際、発表時間を 11 月 21 日としているが、これは誤りである。11 月 21 日に〈学灯〉の「通訊」欄に柢纯から郭虞裳　への手紙が掲載され、その返事は 11 月 22 日発行の〈学灯〉に掲載された。出版当時、この手紙　には筆者が誰であるかは記されていなかった。

14. 引用文中の句読点は筆者が付けた。この啓事が,《宗白华全集》第 1 巻 39 頁に収録された際、文中の「倘蒙读者投稿，无任欢迎,此后（もし読者の投稿を頂けば、大いに歓迎する。ここにお知らせする）」の「蒙」の字が漏れており、「無任」（大いに）が「無不」（～しないものはいない）と誤記され、「此启」（ここにお知らせする）が削除されていた。

15. 陈明远:《 宗白华谈田汉》（宗白華、田漢を語る）、《新文学史料》1983 年第 4 期。

16. 宗白华：《亿郭沫若君》（郭沫若君を憶う），《郭沫若研究》第 4 辑、文化艺术出版社、1988 年版、317 頁。

17. 廖久明《《"鲁迅解剖学笔记事件"之我见——兼谈前见对于史料释读的重要影响》（『魯迅解剖記事件』についての私見——併せて史料解釈における先入観の重要な影響について）《魯迅研究月刊》2015 年第 3 期；廖久明：《论郭沫若<一封信的问题>的写作与评价——兼谈前见对学术研究的负面影响》（郭沫若の〈一通の手紙の問題〉の執筆とその評価について論じる——併せて先入観の学術研究に対するマイナスの影響について），《中国文学批评》2019 年第 2 期。

18. 刘海珍：《郭虞裳、宗白华赴欧时间新考》（郭玉祥と宗白華の渡欧時期の新検証」《現代中文学刊》第 5 号、2022 年。

19. 《〈女神〉及佚诗》の作品説明には発表時間は 1919 年 10 月 21 日とあるが、誤りである。

訳者補足：「《女神》时期佚诗」の章に収録する《梦》（同書 164－165 頁）には「本篇は 1919 年 10 月 21 日上海《時事新報・学灯》に発表。沫若と署名」とあり、『郭沫若年譜長編』第 1 巻 1919 年 10 月 21 日（121—122 頁）の項にも、同様の記載がある。

.

大正期のイバネスブームと郭沫若への影響

藤田梨那

キーワード：スペイン文学、カルメラ、睫毛美、自然主義文学

序文　問題の提起

スペインの近代作家イバネス（Vicente Blasco Ibanez）は、関東大震災の直後、大正 13 年の年末に日本に来訪し、瓦礫の廃墟となった東京に上陸した。倒壊を免れた報知新聞講堂で「小説の社会的影響」という講演を行なった。イバネスの訪日は一週間ほどであったが、日本にイバネス旋風を引き起こした。大正 15 年まで僅か 2 年間で、イバネスの代表作『黙示録の四騎士』をはじめ、ほとんどの作品が翻訳され出版された。日本の人々、はこれまでほとんど知らなかったスペインに俄かに注目するようになった。文学作品だけでなく、スペインの文化、闘牛、ファッションに興味が及んだ。我々は文学の観点から、このようなイバネスブームにいくつかの興味深い問題を見出すことができる。イバネスの文学はどのような性格のものであるか。日本の文学界でどのような反響を引き起こしたか。

イバネスブームに関連して、もう一つ興味深い現象がある。中国の文学者郭沫若に及ぼした影響である。郭沫若は、1924 年 4 月に、翻訳と創作のため、福岡に滞在していた。4 月から 11 月までの滞在期間であったが、その間、彼は河上肇の『社会組織と社会革命』、ツルゲーネフの『処女地』を翻訳し、短編小説「行路難」「落葉」「万引」「カルメラ娘」などを創作した。翻訳と小説を含めて、短い滞在期間に多くの成果を上げ、旺盛な創作意欲を発揮した。その時期の小説にはいくつかの特徴が見られる。身辺小説、書簡体形式、多様な日本女性の描写を挙げることができる。特に小説「カルメラ娘」に見られる女性描写は異色である。登場する日本の少女は固有名詞の名ではなく、「Donna Carmela」と呼ばれ、また「西班牙少女」とも呼ばれている。少女の目、睫毛、髪はすべてスペイン女性と関連させて描かれる。この特徴は、明らかに他の作品と異なる。

なぜ「カルメラ娘」に突如としてスペイン的要素が現れたのか。この問題は当時のイバネスブームと関係すると考えられる。実際、作品中にイバネスについての言及が見受けられる。主人公「私」は、「スペイン作家 Blasco Ibanez の『La Moja Desnude』を読んでいる。」[1]と語る。イバネス、スペインは、この作品を解く鍵のように見える。イバネスブームの中、日本滞在中の郭沫若は、イバネスに注目したのではないか。「カルメラ娘」はイバネスの影響を受けているのではないか。本論は、これらの問題について、

---

[1] 「カルメラ娘」『郭沫若全集』第 9 巻　人民文学出版社　1985 年　pp214　日本語訳は筆者。以下同じ。

当時の社会的背景と作品分析を通して究明していく。

一、イバネスについて

ブラスコ・イバネス（1867－1928）は、スペイン王国バレンシアで生まれ、ここで大学時代まで過ごした。青年時代から共和主義者として反王政運動に身を投じた。革命運動は度々失敗し、その度に逮捕されたり、外国へ亡命した。一生のうちに 30 回投獄されたという。政治運動の傍ら、文学創作を進めた。初期において、ゾラの自然主義文学の影響を受け、『葦と泥』『五月の花』『伽藍』『血と砂』を発表し、人気を博した。第一次世界大戦勃発後、大戦三部作『黙示録の四騎士』『われらの海』『女性の敵』を出版し、ヨーロッパ、アメリカでも大きな反響を起こした。1921 年から、『黙示録の四騎士』を皮切りに、『血と砂』『われらの海』『女性の敵』は次々にアメリカで映画化され、イバネスの知名度を世界各国に広めた。作品に取り上げる対象は貴族から庶民、下層労働者まで幅広く、リアリズムと社会改造の強い理想が作品を貫く。一方、彼はロマンティストでもある。女性の魅惑、純情の美に対する繊細な観察眼を持ち、女性の美の前で葛藤する男の内面を深く掘り下げていく。『裸体のマハ』『われらの海』などはその好例である。

イバネスは、旺盛な情熱と強靭な行動力をもち、パリ、イタリア、アメリカ、メキシコ、アルゼンチンと多くの国に渡り、文学活動を展開した。1923 年 11 月 15 日よりニューヨークから出発して、世界一周の旅に出る。12 月 23 日に横浜に寄港し、東京の報知新聞社講堂で講演を行なった。当時はちょうど関東大震災の後であったので、イバネスは滞在期間中、船に宿泊するしかなかった。日本では一週間滞在した後、朝鮮、中国に向けて出発した。1924 年 1 月 8 日にイバネスが乗った船は上海に到着した。上海滞在はわずか 2 日で香港へと旅立った。その後、出版された旅行記『一作家の世界周遊記』には訪ねた国々の状況を記録してある。

ニ、　日本のイバネスブーム

イバネスが乗った船フランコニア号は 1923 年 12 月 23 日に横浜に入港、その後、約一週間の訪日期間中、彼は東京、鎌倉、日光、京都、奈良、大阪を訪ね、12 月 29 日に下関から朝鮮に向かって出航した。イバネス来日のニュースは連日のように各新聞で報道された。滞在中、世話人として活躍したのは岡部荘一、永田寛定、笠井鎮夫、浦沢一男、中代富士夫であった。彼らはみな東京外国語学校西語科の卒業生で、当時まだあまり注目されなかった西班牙文学を紹介したり、翻訳したりしていた。永田寛定と笠井鎮夫は、イバネスの作品の翻訳権をイバネス本人に申請した経緯からイバネスと交流があった。富永浩は「大正 12 年 23・4 日―ブラスコ・イバーニエスの来日とその日本観」

において、イバネスの訪日を「約一週間にわたったブラスコ・イバーニエス台風」[2] と称した。

イバネスの翻訳はいつ頃から始まったのであろうか。天理大学学術研究会が出した『イスパニア文学・哲学邦訳文献年表』[3]によると、イバネスの小説は、大正 10（1921）年、三浦関造訳『黙示の四騎手』が最初である。次は大正 11（1922）年、小野浩訳の『小屋』である。これらはイバネスが日本に来る前の翻訳である。しかし、1923 年イバネスの来日以後に翻訳は「雨後の筍」の如き勢いで世に現れる。ここに大正期のイバネス翻訳を時間順に並べると次の通りとなる。

大正 10（1921）年 4 月：『黙示の四騎手』　三浦関造訳　天佑社
大正 11（1922）年 8 月：『小屋』　小野浩訳　冬夏社
大正 12（1923）年 12 月：「接吻」　笠井鎮夫訳　報知新聞
「ひきがへる」笠井鎮夫訳　報知新聞
大正 13（1924）年 1 月：『血と砂』　鈴木厚訳　改造社
『五月の花』　岡部荘一訳　新潮社
「落日」　笠井鎮夫訳　中国民報
2 月：『五月の花』　浦沢一男訳　報知新聞社出版部
「落日」　浦沢一男訳　報知新聞社出版部
3 月：『死刑をくふ女』　永田寛定訳　新潮社
所収作品：「キネマの老婆」「二つ当り」「鮪釣り」
「竈をうしろに」「衣掛人形」「落日」
『イバニエス傑作集』　中河幹子訳　聚英閣
所収作品：「恐水病」「ひきがへる」「意外な獲物」
「最後の獅子」「贅沢」「憐憫」
5 月：「メイ・フラワー号」　村上啓夫訳
アルスポピュラー・ライブラリー（２）
6 月：『裸体の女』　中代富士夫訳　精華堂書店
12 月：『女性の敵』　矢口達訳　朝香屋書店
大正 14(1925)年 7 月：『裸体のマアハ』　石井柏亭訳　明星発行所
大正 15(1926)年 5 月 ：「キネマ老婆」　永田寛定訳
『世界短編小説大系』(5) 近代社
「鮪釣り」　永田寛定訳　同上社
「竈をうしろに」　永田寛定訳　同上社

---

[2] 「HISPANICA」1968 年 13 号　pp26　　日本イスパニヤ学会

[3] 『イスパニア文学・哲学邦訳文献年表－翻訳・翻案編』辻井正衛編　天理大学学術研究会　1971 年 10 月

大正 15（1926）年 6 月 :「入日」　阿部知二訳　新潮社 『年刊世界小説集』

以上の出版状況を見て、イバネス翻訳は 1923 年の来日を境に急増していることは明らかである。長編『黙示の四騎手』は 1921 年に翻訳されたのが最初で、他の長編代表作『血と砂』『五月の花』『死刑をくふ女』『裸体の女』『女性の敵』はすべて 1924 年に翻訳紹介されている。また、短編も数多く翻訳されている。これにより、イバネスの来日を境にして、イバネスブームが起こり、彼の日本での知名度が一気に高まった。

翻訳とともに批評も新聞や雑誌に多く見られる。比較的早い時期からイバネスに注目した人物として千葉亀雄を挙げることができる。大正 8（1919）年、千葉は、雑誌「文学世界」に「世界改造に急ぐ欧州新芸術の傾向」を発表、スペイン作家として、イバネスを紹介している。大正 10（1921）年、「早稲田文学」に、「南欧文学の一瞥」を発表する。そこでイバネスの作品『黙示録の四騎士』と『我らの海』を紹介し、「イバネスは寧ろスケエルの大きな事と、改造精神の宣伝を盛った、社会主義的傾向によってより多く人の心を惹き付けて居る。」[4]と批評している。同年 9 月の「早稲田文学」で「芬蘭と西班牙の二新星」を発表し、ここでもイバネスを紹介している。大正 11（1922）年「早稲田文学」に「人類解放の戦士イバネス」を発表、ここではイバネスの主な作品『黙示録の四騎士』『女性の敵』『僧院の陰』『メヤ・ノストラム』『メエフラワア』『女の勝利』『血と砂』などを紹介している。[5]彼は特に『女の勝利』に注目し、詳細に言及している。この『女の勝利』の原題は『裸体のマハ』である。イバネスが来日する大正 13 年に、千葉は、「早稲田文学」に「来朝せるブラスコ・イバニエス―『黙示録の四騎士』その他について」を発表する。ここで彼は、イバネス文学について、「ロオマンチストとしてのイバニエスは、情熱の燃焼と、ことに新時代の角笛の新聲ともいふべきところの、人類改造の提唱において、またスケエルの大きな舞台を自由に駆使し、創造し得る創作力、それを華やかに表現する技巧の豊富においては、恐らく世界近代作家の中に、最も輝やかしい地位を占め得るものであり」[6] と、イバネス文学を世界文学の大枠の中で位置づけて高く評価している。またここでも『裸体のマハ』を挙げて、イバネス文学を「無限で多彩で多種な世界の生産」[7] と評価する。

千葉は、「早稲田文学」のほかに、雑誌「女性」でもたびたびイバネスに関する批評を発表している。特に大正 13 年 6 月号に掲載の「『妻の勝利』を描いたイバニエスの長編小説」という文章では、この作品についての詳細な分析と批評は注目に値する。（千葉のこの文章については、後に詳述したい。）千葉亀雄のイバネス評価は主にその社会

---

[4] 「早稲田文学」大正 10 年 4 月号 pp38－39

[5] 「早稲田文学」大正 11 年 4 月号 pp384－398

[6] 「早稲田文学」大正 13 年 2 月号 pp39－40

[7] 「早稲田文学」大正 13 年 2 月号 pp41

主義的リアリズムとロマンチストの迫力、世界文学的な性格に集中している。

千葉の批評のほかに筆者が注目したのは、大正 13 年「女性」紙上に数回にわたって掲載された西班牙に関する作品と文章である。例えば、大正 13 年 6 月号のコラム「世界の神秘境」に、「エスパニア女と闘牛」（岡田三郎）、10 月号の「各国の女」というコラムに、「スペイン女の美」（永田寛定）などがある。すなわち、イバネスの来日によって日本ではこれまであまり知られていないスペインに興味の目を向け始めたという現象が現れた。

イバネスに注目したもう一人の人物は、芥川龍之介である。「点心」所収「日米関係」（大正 10 年）によると、芥川龍之介は一高時代にすでにイバネスの作品を読んでいた。読んだのは『大寺院の陰』（恐らく英訳本）である。また大正 10 年頃の外国書について、「偶丸善へ行って見たら、イバネス、ブレスト・ガナ、デ・アラルコン、バロハなぞの西班牙小説が沢山並べてあった」[8]と記す。これによると、大正 10 年頃から西班牙文学が注目され始めたことが分かる。イバネスの来日を契機にイバネスの作品や映画への注目度が一気に高まったのである。イバネス来日を受けて、芥川龍之介は「イバネス」という小文を発表した。そこでは Camille Pitollet の『V・Blasco-Ibanez Ses romans et le roman de sa vie』を挙げ、イバネスの人生と創作態度に触れた。イバネスが自ら語る自分の創作は「わたしは小説を生活の上に実現出来ることを示す為である」という件に触れ、芥川は「しかし僕はこれを読んでも、文豪イバネス氏の云うやうに、格別小説を生活の上に実現してゐると云う気はしない。するのは唯小説の広告を実現してゐると云う気だけである。」[9]とやや突き放して、強い共鳴を示さなかった。しかしこの淡白な批評は逆に、現実生活と創作が密接に関係するというイバネス文学の特徴を明らかにしている。

三、　中国のイバネスブーム

イバネスは日本訪問後朝鮮を経由して、瀋陽、北京を訪ね、1 月 8 日に上海に到着した。上海滞在はわずか二日である。その間、徐家汇、静安寺などを観光した。10 日に香港へ出発して、マニラに向かった。短期間の滞在にもかかわらず、中国特に上海では大いに注目された。上海の新聞「申報」「時報」「大陸報」、「東方雑誌」などが、このニュースを報道した。上海卡尔登劇場でイバネスの『黙示録の四騎士』の映画を上映し、しばらくイバネスブームが続いた。

---

[8] 「日米関係」大正 10 年「新潮」第 34 巻 2 号　ここでは『芥川龍之介全集』第 7 巻 pp261 から引用。

[9] 「イバネス」大正 13 年「随筆」第 2 巻 2 号　ここでは『芥川龍之介全集』第 10 巻 pp28 から引用。

中国でのイバネス紹介と翻訳は 1920 年頃から始まる。最初は、胡愈之のはイバネスの短篇「Enel Mar」を英訳本から「海上」という表題で翻訳し、この年の「東方雑誌」第 17 巻第 24 号に掲載した。序文で胡愈之は、イバネスについて簡単な紹介を書き、郷土作家と評価した。1921 年、周作人はイバネスの短編「顛狗病」を翻訳し、雑誌「新青年」に載せた。訳文の最後にイバネスを紹介する小文を付した。同年、また「意、外な利益」を翻訳し、『現代小説譯叢』に収めた。胡愈之と周作人の翻訳はみなイバネスが中国訪問前のものである。本格的な翻訳はほとんど彼の訪中から数年後に出ている。代表的な訳本をここに挙げておく。

1920 年、「海上」胡愈之訳　「東方雑誌」第 17 巻第 24 号
1921 年、「顛狗病」周作人訳　「新青年」第 9 巻第 5 号
　　「意外的利益」周作人訳　『現代小説譯叢』
1928 年、「一个悲惨的春天」 戴望舒訳　「文学週刊」第 5 期
　　「巫婆的女児」　戴望舒訳　　「未名雑誌」第 2 巻第 1 冊
　　『酔男酔女』　戴望舒訳　上海光華書局
　　所収作品：「酔男酔女」「失在上海」「蛤蟆」「奢侈」「落海人」「女囚」
　　「瘋狂」「伊巴涅斯評伝」
1929 年、『啓示録的四騎士』　李青崖訳　北新書局
1930 年、「塞比安的夜」　叶霊鳳訳　『世界短編小説集』所収
1958 年、『血与砂』　呂漠野訳　上海新文芸出版社
1962 年、『茅屋』　　庄重訳　　人民文学出版社

1920 年代のイバネス翻訳はほとんど英訳或いは仏訳からのものである。これは当時、中国ではまだスペイン語のできる人が少なかったためである。翻訳の出る時期から見て分かるように、イバネスの訪中後に、短篇、長篇の翻訳が多く出るようになる。しかし、日本と比べ、翻訳が多く出る時期は 1924 年より数年遅れている。

では、イバネスは中国でどう捉えられているか。小説家茅盾（1896－1981）は 1921 年、雑誌「小説月報」に「西班牙寫實文學的代表者伊本諾兹」（西班牙写実文学の代表者イバネス）と題する文章を発表した。そこでは、スペイン近代文学を古典派とフランス派とに分け、イバネスを後者の代表作家と紹介する。その写実的作風はゾラ、モーパッサンからの影響であると言及する。茅盾はイバネスの作品『五月の花』『小屋』『教会の陰』『血と砂』『黙示録の四騎士』『われらの海』などを詳しく紹介し、風景描写と人物の絵画的描写の特色を称賛する。イバネスの作品は写実的でありながら、独自の思想と美意識を併せもっている。スペイン国内よりもむしろ英米での影響力が強い、と批評した。[10]

---

[10] 「西班牙寫實文學的代表者伊本諾兹」、「小説月報」第 12 巻 3 期　1921 年

周作人は「顛狗病」の最後に、イバネスの特徴について、「我々はこの一篇からその特質を見出すことが出来る。彼はゾラの手法を愛したが、同時に彼は社会的宣伝家でもあるので、彼の作品は自然派の雰囲気とともに理想派の傾向もある。」[11]と批評する。すなわち、周作人はイバネスの写実的な性格を認めると同時に、その理想主義の一面をも捉えている。

魯迅も早い時期からイバネスに注目した。1921 年周作人がイバネスを翻訳することで、兄弟の間でイバネスについて手紙のやり取りがあった。魯迅は周作人のためにフードの『スペイン文学の主流』という書物を紹介している。1926 年魯迅は「世界日報副刊」に「馬上日記」を発表して、イバネスに言及している。「二年来、私の知る限りでは、中国に来た著名な文学者は四人いる。第一は当然あの最も著名なタゴールである。（中略）次はスペインのイバネスだ。中国でも早くから彼を紹介する人がいたが、欧州戦争の折、イバネスは高らかに人類愛と世界主義を唱えた。今年の全国教育聯合会の議案から見て、彼は実に中国に合わない。当然誰も相手にしない。われわれの教育家たちは民族主義を提唱しようとしているから。」[12]魯迅はイバネスの人類愛と世界主義と、当時中国政府が注力していた愛国教育とを対比させて、イバネスを突き放しつつ中国の保守的現状を揶揄している。勿論、魯迅はスペイン文学に対して強い関心をもっていた。1929 年、魯迅はスペイン作家バロハの「面包店時代」の翻訳を「朝花週刊」に発表した。訳者付記に次のように言う、「バロハはイバネスと同様、現代スペインの偉大な作家である。しかしバロハが中国人に知られないのは、大半彼の著作がアメリカの商人が百万ドルを注ぎ込んで映画にして、上海で上映しなかったからだと思う。」[13]ここで言う「百万ドルを注ぎ込んで映画にして、上海に上映」というのは、イバネスの映画化された『黙示録の四騎士』が上海に上映するときの広告費を指す。1924 年イバネス訪中を契機に、上海ではアメリカで制作されたイバネスの『黙示録の四騎士』を上映した。この映画はたいへんな人気を博し、その後数年にわたって上海で上映され続けた。実際、1928 年魯迅は夫人許広平とともにこの映画を鑑賞した。[14]魯迅の言及やイバネス映画鑑賞は、当時上海のイバネスブームの一端を物語っていると同時に、実はイバネス作品が人気を博したのが多分にそれがアメリカのハリウッド映画に変身したためであるという事実を突いている。

1934 年、魯迅は更にバロハの短篇集『バスク牧歌調』を翻訳した。中国の題名は『山民牧唱』である。七篇の作品を含む。それぞれ 1929 年から 1930 年代に発表したものである。「訳者附記」において魯迅は、作者バロハを紹介し、「文学の上では、イバネスと

---

11 「顛狗病」後記　「新青年」第 9 巻第 5 号　pp671

12 『魯迅全集』第 3 巻　pp341　日本語訳は筆者。以下同じ。

13 『魯迅全集』第 10 巻　pp451

14 『魯迅全集』第 14 巻　日記 pp711

名を等しくする。しかし、本領から言うと、恐らくイバネスの上を行くであろう。」と[15]
魯迅から見て、むしろ描写の技巧や深さなどではバロハはイバネスに勝っているというのである。実際イバネスとバロハはどちらが優れているかは二人の作品を比較して見ないと分からないが、ある意味では、イバネスブームの中で魯迅はより冷静にイバネスを見、そして同じスペインの作家バロハを見出した。つまり、イバネスの訪中が中国の人々にスペイン文学に注目するようになる一つの契機となった、と言えよう。

四、1924 年頃の郭沫若の動静

イバネスが日本と中国を騒がせた頃、郭沫若の動静はどうであったか。1923 年 4 月 1 日、彼は九州帝国大学を卒業して、一家を伴って上海へ帰国した。大世帯で帰国したが、就職して仕事をするわけでもなく、同じころに上海に来ていた創造社のメンバーの成仿吾、郁達夫と民厚南里に「籠城生活」をしていた。成仿吾も郁達夫も無職であった。郭沫若は『創造十年』の中で、民厚南里を首陽山に譬え、彼ら三人を伯夷、叔斉、仲雍と称して、当時の生活を回想している。しかし彼らには、やらなければならない仕事があった。新しい機関誌の発刊である。1921 年夏、創造社は東京で創立され、翌年 5 月に最初の機関誌「創造季刊」が発行される。発行元は上海泰東書局である。郭沫若は雑誌発行のためにこれまで上海と福岡を数回往復した。民厚南里に籠城した彼らは、5 月に第二の雑誌「創造週報」を、7 月には第三の雑誌「創造日」を発刊した。創造社は上海で活発に文学活動を展開したのである。

当時、上海の文壇は北京と並んで、中国文芸の中心になっていた。多くの文学結社がここに集結し、様々な雑誌が出版されていた。各文芸団体の間に批評合戦や論争も度々起こった。創造社の動きは、早速文学者たちの目を惹きつけた。「創造週報」の創刊号に掲載された成仿吾の「詩之防御戦」は、胡適、周作人ら文学研究会のメンバーの攻撃を受けた。これを皮切りに、創造社と文学研究会、孤軍派、醒獅派と激しい論争を繰り広げた。[16]

1923 年は、郭沫若にとって、「創造季刊」「創造週報」「創造日」と三つの雑誌を編集しながら、文芸界の論戦に明け暮れる一年であった。一方、生活の面では、泰東書局から満足した給料が支給されないため、彼はほとんど困窮していた。1924 年に入って、郭沫若と創造社のメンバーは、それぞれ新しい道を模索し始めた。彼らは泰東書局と決別することにした。「創造日」は 1923 年 11 月に、「創造季刊」は 1924 年 2 月に、「創造週報」は 1924 年 5 月に停刊した。郭沫若が言うように、「あの頃、私は確かに人生の岐路

---

[15] 『山民牧唱・序文』訳者附記　『魯迅全集』第 10 巻　pp384　日本語訳は筆者。

[16] 創造社と文学研究会、孤軍派、醒獅派との論戦については、『創造十年』及び『創造十年続篇』において、郭沫若は詳細に記している。

に立っていた」[17]のである。当時、彼が直面した問題は三つあった。一つは、思想上の不安である。中国の複雑で混沌とした社会情勢の中で、これまで抱いてきた汎神論や自由の思想は、幼稚に見えてきた。しかし一方で、マルクス思想に心惹かれながらも、それは漠然としたものであった。二つめは、学問への心残りである。彼は九州帝国大学時代から生物学に興味をもっていた。日本の大学で生物学を学びたいと考えていた。三つめは、生活の問題である。上海に一年いても安定した収入が得られない。これでは、子供三人を育てるのが困難であった。彼は 1924 年 2 月にまず妻子を日本に帰し、執筆中の「岐路三部曲」を脱稿してから、4 月に福岡へ赴いた。このように、1923 年 4 月から翌年春までの一年は、郭沫若にとって、嵐のような一年であった。

イバネスが北京、上海を訪れた時期に郭沫若は上海にいた。彼は、「1924 年は文芸界において多事な一年であった。」[18]と『創造十年続篇』で回想している。重要な事件として、レーニンの死、バイロン死後 100 年、カント誕生 200 年を挙げているが、1924 年初頭のイバネス来訪について触れていない。しかし、前述のように、イバネス訪中のニュースは、当時上海の各新聞の紙面に出ている。イバネスの映画が上映され、のち数年に渡り翻訳が続出するなど、中国の文壇にイバネス現象が続いた。上海にいた郭沫若は、当然この状況を目の当たりにしたのではないか。「東方雑誌」「新青年」「小説月報」は、彼がよく接していた雑誌であるので、そこに発表された胡愈之や周作人のイバネス翻訳や茅盾のイバネス批評を読んでいたと考えるのが自然であろう。

イバネスが来中した 1924 年頃、アメリカのハリウッドで映画化された『黙示録の四騎士』は上海でも上映されたが、イバネスの作品の翻訳は、1920 年の胡愈之訳「海上」（「東方雑誌」第 17 巻第 24 号）と 1921 年の周作人訳「顛狗病」（「新青年」第 9 巻第 5 号）がある程度で、本格的な翻訳はまだ始まっていなかった。郭沫若はこの時期にイバネスの作品を読んだ痕跡が見当たらない。

一方、海の対岸の日本では状況はかなり違っていた。前述のように、日本では、1921 年にすでに三浦関造訳の『黙示の四騎手』が出ていた。1923 年まで短篇の翻訳も数篇出ていた。イバネスの訪日を受けて、1924 年に俄かに多くの翻訳が出た。『血と砂』『五月の花』「落日」『死刑をくふ女』「メイ・フラワー号」『裸体の女』『女性の敵』などは 1924 年に世に出た翻訳である。イバネスの代表作はほとんど出揃っている。

郭沫若が上海から福岡に渡ったのは 1924 年 4 月 1 日である。つまり、上海でのイバネスブームを潜って日本に来たのである。彼の福岡滞在は 4 月から 11 月中旬まで約 8 ヵ月である。その間、河上肇『社会組織と社会革命』の翻訳のほか、数篇の短編小説を創作した。注目したいのは、この時期の創作にイバネスの痕跡が色濃く出ていることである。それが小説「万引」と「カルメラ娘」とである。

---

[17] 『創造十年』十三　『郭沫若全集』第 12 巻　人民文学出版社　pp184

[18] 『創造十年続篇』二、『郭沫若全集』第 12 巻　人民文学出版社　pp208

五、「万引」「カルメラ娘」とイバネス

「万引」は、1925 年 1 月に雑誌「学芸」第 6 巻第 7 期に掲載された短篇小説である。文末の日付は 1924 年 9 月 18 日夜とある。郭沫若が福岡滞在中の執筆である。作品は、主人公松野が友人に勧められたフランスの作家アルフレッド・ド・ブィニの『チャタートン』を求めて書店を訪れる。やっとの思いで『チャタートン』を見つけたが、仕事探し中の松野にはとても手が出ない値段であった。しかし、読みたい心が断ち切れず、ついに盗んでしまった。帰宅後、妻に咎められ、後悔の念に苛まれる。最後は書店に行って、本を書棚に返して、清々しい気持ちを味わうという話である。作品の主眼は“万引き”という道徳的な反省と創作の主体性の自覚、いわば松野の内面の葛藤を描くところである。しかし、作品に当時の新刊書を紹介する箇所はたいへん興味深い。

> 松野はこの書店では常連である。彼はある書棚の前に立つ。そこは新刊の文学書のコーナーである。
>
> 『死刑をくふ女』―『吸血鬼』―『飢餓』―『白き石の上にて』―『バスク牧歌調』―『大飢饉』……これらはみな最新時代の文芸陣営最前線の構図だ。書名を見るだけでも人を引き付ける魔力が十分だ。[19]

ここに挙げた書籍は、ほとんど 1924 年に日本語版として出版されたものである。一番に挙げた『死刑をくふ女』はスペインのイバネスの作品である。これらの作品の情報を挙げると次の通りである。

『死刑をくふ女』スペイン、イバネス著、永田寛定訳、新潮社、1924 年 3 月
『吸血鬼』仏、マルセル・シユウオッブ著、天野目源一訳、新潮社、1924 年
『飢餓』ノルウェー、ハムセン著、三上於菟吉訳、進文堂　1924 年
『白き石の上にて』仏、アナトール・フランス著、平林初之輔訳、新潮社、1924 年
『バスク牧歌調』スペイン、バロハ著、笠井鎮夫訳、ゆまた書房、1924 年

更に、松野が最初に求めた『チャタートン』も小林龍雄訳として 1924 年に新潮社から刊行されたものである。上記の書籍のうち二つがスペインの作品である。上海のイバネスブームを潜ってきた郭沫若は、日本で初めてまとまったイバネスの作品に接したのである。

「カルメラ娘」は 1925 年 2 月の「東方雑誌」に掲載され、「万引」とほぼ同時期の作品である。この短編小説は書簡の形をとっている。中国留学生「私」は友人宛ての手紙

---

[19] 「万引」『郭沫若全集』第 9 巻　　pp185-186　日本語訳は筆者、以下同じ。

に、既婚者でありながら福岡のとある駄菓子屋の娘に恋心を抱き、苦しむ心を告白し、最後に自殺を決意することを告げる。「私」は駄菓子屋の娘の名を知らない。カルメラ焼きを売る駄菓子屋であることから、その娘を「カルメラ娘」と呼ぶ。「私」の趣味は読書である。毎日、図書館で文学作品を読む。夜はいつも妻に読んだ作品について話す。中に、イバネスのある作品が登場する。

> 妻は私に、今日はどんな本を読んだかと尋ねる。私はすぐに嘘をついた。スペインの作家 Blasco Ibanez の『La Moja Desnude』を読んだと答えた。実は、数年前に読んだ作品だ。私は記憶に薄っすら残っているその内容を三分の一ほど話し、読んだのは途中までで、明日また読みに行くと言った。[20]

この『La Moja Desnude』はイバネスが 1906 年に発表した長編小説である。日本語タイトルは『裸体の女』あるいは『裸体のマハ』。最初の日本語版は 1924 年 6 月精華堂出版の『裸体の女』である。翻訳者は中代富士男である。訳者の序文によると、この作品は原語から直接翻訳したものである。作中の「私」はこの訳本を読んだのではないか。そうであれば、それは決して「数年前に読んだ作品」ではない。イバネスの長編の翻訳は当時の中国ではまだなかった。一方、日本では 1924 年の時点ですでに『裸体の女』を含め、イバネスの多くの作品が翻訳され、世に出回っていた。郭沫若はこの好機を捉え、早速イバネス及び他の西班牙の作品を読んだのではないか。つまり、彼がイバネスの作品に接したのはこの時期である。

六、「カルメラ娘」の人物描写に見られるスペイン女性の要素

「カルメラ娘」には三人の女性が登場する。「私」の妻瑞華と S 夫人、そしてカルメラ娘である。スペイン女性の色彩を色濃く帯びるのがカルメラ娘である。ある日、中国留学生「私」は、妻との会話で偶然駄菓子屋の娘（カルメラ娘）を知った。

> ある夜、私たちは何とかいう人の小説に描かれている女性の睫毛美に話が及んだ時、瑞華（私の妻）は不意に、花壇近くの路地に Karumera を売る店にいる娘さんの目がとてもきれい、睫毛がとても濃い、と言った。[21]

妻にとって、駄菓子屋の娘の話は単なる噂話でしかなかったが、「私」は却って大い

---

[20] 「カルメラ娘」　『郭沫若全集』第 9 巻所収　pp214 - 215

[21] 「カルメラ娘」『郭沫若全集』第 9 巻所収　pp207－208　日本語訳、下線は筆者による。以下同じ。

に心惹かれた。娘の魅力のポイントは目、睫毛、Karumera の三点である。「私」はそれから駄菓子屋の娘を見に行って、その美貌にすっかり心を奪われてしまった。注目したいのは、作品中に、カルメラ娘に関する描写の中に目、睫毛の描写が頻繁に出てくる。カルメラ娘の命名と容貌、魅力はしばしばスペイン女性と関係して描いている。また、本論文第五ですでに見てきたが、この作品に、イバネスの『裸体の女』に関する言及がある。一体、作者はどのようなルートでスペイン女性に関する知識を得たのか。カルメラ娘の描写にイバネスの『裸体の女』がどのように関わっているか。この問題を次の三項目に分けて分析していく。

１，　カルメラ娘の容貌描写

「カルメラ娘」に登場する日本少女の容貌については、ほとんど目、睫毛そして髪に集中して描かれている。それを挙げておく。

> 障子が少し開いた。一人の少女が顔を半分のぞかせた。私は震えるほど驚いた。（中略）ああ、御覧なさい、あの子の目を。（中略）彼女の眼はあんなに黒く光り、生き生きとして、魅力に満ちている。あの子は、私を見てすぐに目を伏せた。その睫毛はあんなに濃密、あんなに鮮やか、あんなに生命感を帯びていることよ！
> 伏し目の睫毛はいま咲き始めの半輪の六月菊のよう。（中略）ああ、あの子の豊かな黒髪よ！そのギリシャ式の結髪に挿してある西班牙針を私は見た。[22]

> 草原の一本一本の若草はみなあの子の睫毛に見える。空気中のすべてのきらめきはみなあの子の目に見える。あの子は私の全魂を占領してしまった。[23]

> 私は瑞華を抱きながら密かに西班牙の少女を思う。私はあの子の睫毛を思い、あの子の目を思い、あの子の全部を思う。[24]

> 蒼い海の白波が私に手招きしている。私はあの冷たい腕に手をまわし、あの人を酔わせる処女紅を追い求め、あの睫毛美を追い求めていく。[25]

---

[22] 「カルメラ娘」　『郭沫若全集』第 9 巻所収　pp209、210
[23] 「カルメラ娘」　『郭沫若全集』第 9 巻所収　pp213
[24] 「カルメラ娘」　『郭沫若全集』第 9 巻所収　pp215
[25] 「カルメラ娘」　『郭沫若全集』第 9 巻所収　pp232

彼女は古代ギリシャの彫刻に近代の色彩を加えたようなものだ。[26]

カルメラ娘は日本の少女として登場する。そのしなやかな仕草や柔らかい声、優しい心使いに十分に日本女性の美しさが漂っているが、作者は少女の美のポイントをその目、睫毛、髪に絞る。目は黒く光り、生き生きとして、魅力に満ちている。睫毛は濃密で鮮やか、生命感を帯び、まるで半輪の六月菊のようである。豊かな黒髪の結髪に西班牙針を挿している。仕草、聲、心使いに見られる日本的な美に対して、目、睫毛、髪には西洋女性の美或いは現代女性の美を帯びる。実は、このような描写の背景には大正時代のファッション意識の変化とスペイン文学の影響があったと考えられる。

日本女性の美は平安時代より長い間にわたり、眉をそり、切れ長の目、白く透き通るような顔色、きめ細かい白肌が美の重要な要素とされてきた。睫毛にはほとんど注目しなかったようである。明治時代に西洋文化の影響を受け、日本人の美意識も徐々に変化するようになる。大正期にはモダンな洋風化粧が普及した。目、睫毛、眉を重視し、目をパッチリ見せるためにアイシャドウ、アイライン、マスカラやつけ睫毛を施した。[27]

女性美の変化は、絵画の世界にも見られる。竹久夢二や山村誠一郎の大正期の女性絵には睫毛が描かれている。文学においても、夏目漱石や芥川龍之介の作品に睫毛が描かれている。特に、芥川龍之介は睫毛の描写に長けている。[28]「大導寺信輔の半生」で、女性描写の手法について、「彼は日の光を透かした耳や頬に落ちた睫毛の影をゴオテイやバルザックやトルストイに学んだ。」[29]と書いている。確かに目や睫毛の描写はロシヤ文学、フランス文学にも多く見られる。しかし、「睫毛美」という表現はこれらの作品にはほとんど見ない。これは郭沫若独自の表現と言えよう。郭沫若が「カルメラ娘」の日本少女の目や睫毛をことさらに描写し、「睫毛美」という表現まで繰り返し使うのには、大正期のモダンな美意識を反映しているのではないか。また、上に引用した部分に、「西班牙の少女」という表現も興味深い。

もう一つは、スペイン文学の影響である。前述のように、イバネスの来日を契機として、日本では俄かにイバネス及びスペイン文学の翻訳が盛んになった。イバネスと他のスパイン作家の作品の翻訳は当然ながら日本の人々にスペインに対する関心を引き起こす。例えば、大正時代の代表的な文芸雑誌「女性」の紙面にイバネスやスペインを紹介する文章が頻繁に掲載される。日本語版『裸体の女』の出版と時を同じくして、「女

---

[26] 「カルメラ娘」　『郭沫若全集』第 9 巻所収　pp215

[27] 『モダン化粧室』ハリー・牛山著　寶文館　1931 年　第 5、6、11 章及び口絵コメント参照

[28] 漱石の『それから』『明暗』、芥川龍之介の「捨児」「雪」「金将軍」「湖南の扇」「奇怪な再会」などに睫毛の描写が見られる。

[29] 「大導寺信輔の半生」『芥川龍之介全集』第 12 巻　岩波書店　pp53

性」1924 年 6 月号では「世界の神秘境」というコラムを設け、スペインに関係する二つの文章を掲載している。一つは、千葉亀雄の評論「“妻の勝利”を描いたイバネスの長編小説」。もう一つは、岡田三郎の「エスパニヤ女と闘牛」である。また同年 10 月号では「各国の女」というコラムに「スペイン女の美」（永田寛定）を掲載する。これらの文章は明らかに当時流行の西班牙文学を意識したものである。実はここに挙げた三つの文章について、郭沫若の「カルメラ娘」の創作と関係があると筆者が考える。

千葉亀雄の評論「“妻の勝利”を描いたイバネスの長編小説」に挙げた“妻の勝利”はすなわちイバネスの『La Moja Desnude』（裸体の女、或いは、裸体のマハ）の英訳タイトル「Woman Tri-umphant」の日本語訳である。ここで千葉は『裸体のマハ』についてかなり詳細な解説と批評をしている。「裸体のマハ」は言うまでもなく、スペインの名高い画家フランシスコ・デ・ゴヤの名作である。この絵画の題名を冠するイバネスのこの作品は、ゴヤの名作「裸体のマハ」の肉体美を生涯追及したスペインの画家レノバーレスは、生前に虐げられた虚栄心と嫉妬心の強い妻が、却って死後において夫の思い出の中に生き、その存在感が遂に老いゆく夫の全機能を占領する、という物語である。千葉はこの作品の本質について指摘する。「男性―或いは一人の夫の内面的生活や、愛情生活の中に、女―或いは一人の妻の占める地位や、価値や、本質がどれほどあるものか。蠱惑の美と純情の美が、どちらが最後の勝ちを占めるものか。この作物は、それを内へ、内へと深め、掘り下げていった着想において、この作家の女性観察の中でも、恐らく類のない深刻なものだと思います。」[30]この作品は、近代享楽主義やゾラ風の自然主義文学の性格をもちながらも、強い理想主義を底流としている。画家の内面を深く掘り下げっていく心理描写も優れている。

『裸体のマハ』を精読すると分かるように、画家レノオパレスは、妻の死後に初めて妻の魅力を発見する。女人の肉体美を生涯追及し、描き続けたが、最後は妻の肖像から妻の目の奥に潜む内面、真の愛情を見出す。画家にとってそれが真の美であった。つまり、彼はこれまで追い求めてきた現実の肉体美から内面の美、理想的な美を見出したのである。そして、その発見の重要なポイントは妻の目であった。

> （妻の肖像画）真のゴヤの絵に近いような美しさをして……その瞬間彼は……其愛らしき顔と其貴族的蒼白な顔に、東洋的表情の深い眼が泣いて居るやうに生き生きして居るのを見た。（中略）其視線は常に彼を追求し続けて泣たが如く、恨む如く、叱責するが如く、生き生きとして瞳は光って居
> た。（中略）彼の魂迄も見すかすやうに其瞳は彼に迫るのだった。[31]

---

[30] 千葉亀雄「『妻の勝利』を描いたイバネスの長編小説」、「女性」1924 年 6 月号　pp121

[31] 『裸体の女』pp328－330　下線は筆者による。

老画家が妻の美を発見した瞬間である。これまで意識もせずに描いた妻の肖像画に、いまやゴヤの「裸体のマハ」に紛う美を見出したのである。それからの老画家は物に憑かれたように、最後の妻の肖像画を描き始める。その最後の肖像画にある妻は「大きな目、本当に奇怪な開かれた眼」をして、見る人を惹きつける。

> 其瞳にだけ或懐しみがあった。其れは遥な彼方から、画面を横ぎってやって来たやうな奇異な光りを持って居た。[32]
>
> 無限の神秘を持つ其眼よ！芸術家の頭から足迄、冷水をぶっかけるやうな其冷ややかな眼よ！
>
> 妻の死後に……彼は、ホセフイーナ（妻の名）が生前決っして持ってゐなかった美を画面に躍らして描いている。(中略) 確かに此絵は生前に見られなかった美だ。[33]

妻の目は内面を語りながら、魂を貫くような魅惑をもって夫に迫ってくる。愛人の伯爵夫人も多くのモデルも妻の美の前でことごとく色褪せ、消えてしまう。妻の勝利である。イバネスの描写は画家の内面の動揺、衝撃、欲情を深刻に、リアルに激しく描き出す。その狙いは、人間の欲望の本質を暴くところにあると言える。

『裸体のマハ』は、郭沫若の「カルメラ娘」中に登場していることは本論文第五で見たとおりである。「私」は、妻にスペイン作家 Blasco Ibanez の『La Moja Desnude』を読んだと語る件である。明らかに、郭沫若はイバネスのこの作品に接したことを示唆している。日本少女の眼、睫毛などに焦点を当てて描写する手法は、イバネス『裸体のマハ』に見られる目の描写の特徴に触発されたのではないか。つまり、目や睫毛に少女の魅力を集約し、その美を強調するという発想である。

スペイン女性の美については、永田寛定の「スペイン女の美」(1924 年「女性」10 月号）という文章も興味深い。「スペイン女の面貌に至っては、いはゆるギリシャ型の整ひをそのままにして潤ひと優しみとを十分に具へた、言い換へれば近づきがたい神々しさなぞを棄てて如何なる男性をもうっとりと見恍れさせてしまふ完全さを持つものと言って差支へなからう。その魅惑の中心は長い睫毛にぼかされた、大きな榛実形の眼だらう。（中略）彼女等の髪を飾って最もよく似合ふものは大なる鼈甲の高櫛だ。（中略）スペインの歌女や舞妓は闘牛師と共にもはや世界的の名声を博してゐる。」[34]永田のこの

---

[32]『裸体の女』pp370　下線は引用者、以下同じ。

[33] 同上　pp386－387

[34] 永田寛定「スペイン女の美」(1924 年「女性」10 月号）pp295－296　下線は筆者による。

文章は、大正時代、人々がこれまであまり知らなかった国スペインに開眼し、スペイン女性のエキゾチックな美に興味をもち始めたことを物語る。ここでは、永田はスペイン女性の美のポイントとして、睫毛や眼、髪飾りの櫛を強調する。その容貌の魅力は「ギリシャ型」の上に、男性を見恍れさせてしまう「潤いと優しさ」を同時にもっている点にある。すなわち、古典的端正さに現実的色彩を加えた特質である。

永田寛定のこの文章を郭沫若の「カルメラ娘」と対照させてみると、登場するカルメラ娘に関する描写にもスペイン女性の特徴が見られる。「私」はカルメラ娘の魅力を「古代ギリシャの彫刻に近代的色彩を加えたようなもの」と表現する。この「古代ギリシャ」と「近代的色彩」のコラボレーションはまさに永田が言うところの「ギリシャ型」と「潤いと優しさ」の焼き直しではないか。

千葉亀雄の『裸体のマハ』評価と言い、永田の「スペイン女の美」と言い、スペイン女性特有な魅力をその目に見出している。この二つの文章はともに 1924 年の「女性」に発表されている。郭沫若は同じ時期に彼らの文章を読んだのではないか。このことについて、郭沫若自身は言及していない。

スペイン女性の髪飾りについて、永田、千葉はともに言及している。千葉の評論には、スペイン女性の髪飾りについても興味深い言及がある。彼は「ピンの日本流行」に触れて、「たとへばスペイン・ピンとして、わが国の若い女性達の頭髪の上に、岬のやうに突出して居る、あの大きな鼈甲の櫛などもやはりその一つな（ママ）さうです。」[35]と言う。ここでは単に一つの挿話ではあるが、大正期の髪飾りとスペインの関係を垣間見ることができる記述である。スペイン簪やスペイン櫛はスペイン女性のファッションの一つで、日常的、また儀式や祭日に髪に飾る。19 世紀に西班牙のファッションとともに簪や櫛はフランスで流行し、やがて中欧にも波及した。日本では、江戸時代に流行した「南蛮趣味」工芸品にスペイン櫛[36]が出回っていたり、明治、大正時代にスペインの鼈甲の髪櫛や髪飾りが流行したという。[37]千葉の言及はこのような社会背景を反映していると言えよう。郭沫若は「カルメラ娘」に、日本少女の簪をわざわざ西班牙針と表現したのももしかすると、千葉の文章に触発され、或いは当時のファッションを反映した可能性はあるのではないか。

郭沫若は「女性」に掲載された千葉亀雄や永田寛定の文章を読んだのであろうか。ここで雑誌「女性」について見てみたい。小野高裕・西村美香・明尾圭造による『モダニズム出版社の光芒：プラトン社の 1920 年代』や平井紀子の「日本のファッション誌：発祥と変遷」に雑誌「女性」についての詳細な紹介と研究が見られる。「女性」は文芸雑誌として 1922 年にプラトン社から発刊され、1928 年まで続いた。このプラトン社は、

---

[35] 千葉亀雄「『妻の勝利』を描いたイバネスの長編小説」、「女性」1924 年 6 月号　pp122

[36] 櫛かんざし美術館ホームページ　http://kushikanzashi.jp/

[37] 「櫛—Japaniese Wiki Corpus」https://www.japanesewiki.com/jp/culture/簪.html 1/7

中山太陽堂社長中山太一によって設立した出版社である。中山太陽堂は明治 36 年に神戸市で開業し、もともと「クラブ洗粉」や「クラブ白粉」所謂化粧品を扱っていた。大正期に大阪に新店舗と工場を拡大した。プラトン社も大阪で設立された。「女性」の歴代編集者は松阪青渓、小山内薫、直木三十五といった著名なジャーナリスト、文学者である。執筆者には、泉鏡花、室生犀星、与謝野晶子、谷崎潤一郎、武者小路実篤、芥川龍之介、志賀直哉、大佛次郎など、謂わば「当時きらめく作家たち」の名が連なっている。掲載内容は小説、演劇、詩歌、評論とあって、純文学雑誌の風貌を全面に出している。プラトン社は東京に支局を置いたので、「女性」は阪神エリヤと東京で広く流通し、当時の文壇でも高い評価を博した。[38]

「女性」のもう一つの特徴について平井氏は指摘する、「その特色は何といっても、表紙や扉にファッションプレートに描かれた西欧のモダンな女性を載せたことにある。（中略）フランスのアール・デコ期最高のファッション誌「ガゼット・デュ・ボン・トン」(Gaazette du bon ton)のファッションプレートをそのまま模写するか、あるいは日本風にアレンジして、読者に西欧のファッションを紹介した。」[39]この点について、『モダニズム出版社の光芒：プラトン社の 1920 年代』においても、雑誌の表紙、口絵、挿絵などを、当時フランスの最もモダンな雑誌「ガゼット・デュ・ボン・トン」との対比研究が見られる。「女性」の芸術的デザインについて、「大衆の支持を得たのは、当時それほどに欧米文化への憧憬もしくは興味が強かった現れである。（中略）プラトン社のビジュアル・デザインはそうした欧米文化と日本の大衆の間に入って、懸け橋的役割を果たした。」[40]と評価する。つまり、「女性」は文芸雑誌でありながら、ファッションアートの特色も兼ね備え、大正時代のモダニズムに貢献したのである。

雑誌「女性」の性格と上に挙げた千葉亀雄や永田寛定の文章の内容から考えた場合、たとえ郭沫若自身の言及がなくとも、何らかの影響を受けていたと考えるのが自然だろう。阪神間で流通していたこの雑誌は、福岡にいる郭沫若の目に触れる機会があったことは十分に考えられる。[41]ちなみに、永田寛定はイバネスの『死刑をくふ女』（日本語版は 1924 年 3 月発売）の翻訳者でもある。すでに言及したように、郭沫若の小説「万引」

---

[38] 「女性」三巻三号（大正 12 年 3 月）編集後記に「本誌所載の創作は、終に文壇第一級の標準をもって律せられるやうになりました。初めは単に婦人雑誌の創作とのみ見過ごしていた評壇も今では筆の本誌に及ばぬのを恥とするやうになりました。」『モダニズム出版社の光芒：プラトン社の 1920 年代』　淡交社　2006 年　pp29

[39] 平井紀子「日本のファッション誌：発祥と変遷」神戸短期大学「ファッションドキュメンテーション」1995 年 12 月号　pp13―29

[40] 『モダニズム出版社の光芒：プラトン社の 1920 年代』pp190

[41] 丸善書店はすでに明治 44 年頃に福岡に支店を置いたことから、当時福岡に多くの書店があったと考えられる。

にすでに『死刑をくふ女』が登場している。主人公松野が書店の棚にこの作品を見て、これは「最新時代の文芸陣営最前線の」書物だという。つまり松野が見た『死刑をくふ女』は永田寛定の翻訳本であると推測できる。これらのことを総合的に考えて、郭沫若の「カルメラ娘」に見られるスペイン女性に通じる描写は、当時日本のイバネスブームやスペインへの関心という社会現象が背景にあったと言えよう。

２，　カルメラ娘という命名

小説「カルメラ娘」に登場する中国人留学「私」は駄菓子屋の少女にカルメラという名を付ける。

> 私はあの子の名前を知らない。あの子が売っているのはKarumeraというお菓子だ。この語は恐らく西班牙語のCarameloからきているだろう。この語の発音が気に入ったから、私は西班牙式に倣って、彼女をDonna Carmelaと呼んだ。あの子に西班牙女性の洗礼を受けさせた。[42]

「カルメラ娘」に登場する日本の少女は、カルメラ焼きを売る駄菓子屋の娘である。カルメラ焼きは安土桃山時代に西洋から伝来した所謂南蛮菓子の一つである。伝来の初期において、ポルトガル人宣教師が持ち込んだとされている。15世紀半ば、ポルトガルは徐々に海運力、軍事力を強め、世界進出に乗り出した。1550年、平戸に最初のポルトガル船が来航し、貿易船に便乗して来日したイエズス会の宣教師たちによってキリスト教は平戸、長崎を中心として国内に広まっていった。戦国大名はポルトガルとの交易によって、鉄砲や火薬などを手に入れた。1549年、フランシスコ・ザビエルが鹿児島に上陸し、数年に渡り日本で布教活動を行なった。当時、キリスト教宣教師は布教のために南蛮菓子を配布したとされる。南蛮菓子の伝来について、中川清氏は論文「南蛮菓子と和蘭陀菓子の系譜」において、『太閤記』（1626年）『原城紀事』（1846年）などの史料から、当時ポルトガル人が持ち込んだ菓子類を挙げている。『原城紀事』によると、弘治3年（1557年)、ポルトガル人伴天連（バテレン）が、肥前唐津で布教したときポルトガルの「美酒」(ぶどう酒）を振る舞い、菓子を作った。その菓子は、「角寺鉄異老（カステイラ)、復鳥而（ホウル)、革二滅以而（カルメイル)、掩而皿兮（アルヘイル)、可目穴伊（カンヘイ)」[43] の五種類である。この中にカルメラが含まれている。更に氏は、『太閤記』のバテレンに関する記述に、「かすていら、ぼうる、かるめひる、あるへい糖、こんべい糖」を上げ、「かすていらなど5種類南蛮菓子は『原城紀事』の記述と全

---

[42] 「カルメラ娘」『郭沫若全集』第9巻所収　pp213

[43] 中川清「南蛮菓子と和蘭陀菓子の系譜」駒澤大學外国語部論集、2003年3月　pp72

く同じである。」[44]と指摘する。カルメラのポルトガル語とスペイン語はともに caramelo であるが、「革二滅以而（カルメイル）」はポルトガル語「caramelo」の発音と一致する。[45]

南蛮菓子は、伝来当時は珍しい菓子であったが、キリスト教迫害の江戸時代を生きのび、日本に定着した。中でもカルメラは、大正時代には一般庶民も作るようになり、祭りや縁日の出店でも売られるようになる。カルメラ焼きと呼ばれ、庶民的な菓子になったのである。

「私」はなぜ駄菓子屋の娘に「Donna Carmela」と名付けたのか。筆者が注目したのは、上記作品の引用文下線部にある三つの要素、カルメラの語源、この語の発音、そして西班牙女性の洗礼名と、である。お菓子としてのカルメラの伝来とカルメラという名前はポルトガルと関係することは文献の記述で明らかである。これに対して、「カルメラ娘」の主人公「私」は、カルメラの語源をポルトガル語ではなく、スペイン語 caramelo としている。無論、カルメラの語源はポルトガル語とスペイン語では同じく caramelo である。「Donna」は女性の名の前に置く尊称で、古イタリア語 Dona が語源である。「Carmela」は、『西日中辞典』によると、これは女子の洗礼名 Maria del Carmen の愛称である。Maria del Carmen の愛称は「Carmela」の外に、Carmina、Carmenchu、Maria Carmen、Menchu がある。[46]すなわち、スペインカソリックにおいて、女子が洗礼を受ける時に付与される洗礼名 Maria del Carmen に付随する愛称の一つは「Carmela」である。この「Carmela」は、本来、飴である「caramelo」とは別語であるが、その発音は日本に伝来し、大正期に定着したお菓子カルメラ Karumera の発音と同じである。「私」が駄菓子屋の少女に「西班牙女性の洗礼」を受けさせるというのは、「Carmela」はスペインカソリックの洗礼名と関係するからである。更に「Carmela」の発音は、日本語のカルメラと類似しているので、愛称の甘いニュアンスを醸し出す。郭沫若が作品にスペイン語を取り上げたのは、やはりカルメラ娘に多くスペインの色彩を持たせたかったからではないか。

３，　西班牙女性の物語

「カルメラ娘」にスペイン女性に関する一つの逸話が挿入されている。

西班牙女性は最も残酷なのだ。何とかいう書物に一つの物語を読んだ。一人

---

[44]中川清「南蛮菓子と和蘭陀菓子の系譜」駒澤大學外国語部論集、2003 年 3 月　pp73

[45] 小学館『プログレッシブ　ポルトガル語辞典』に、「caramelo」の発音は[karamelu]とある。また小学館『西日中辞典』には、「caramelo」の発音は[karamelo]とある。

[46] 小学館『西日中辞典』の「Carmela」と「Carmen」の項参照。

の男がある西班牙の少女に求婚した。少女は彼を 25 回鞭打ちした後求婚を受け入れると言った。男はすぐに背中を露わにして少女の鞭を受けた。少女は 24 回まで打って止まった。男は震えながら最後の鞭を待った。そのあとの楽しい恋愛の喜びを想像しながら。しかし、25 回目の鞭はついに打たれなかった。25 回まで打たなければ、結婚を承知しないということだ。24 回で男の背中は血だらけになっていた。彼女は鞭を打ち捨てて何くわない顔で去ってしまった。これこそ西班牙女性の手本だ。（中略）ああ、しかし、私はあの子の無形の鞭打ちをすでに 24 回を受けた。[47]

この挿話は何のために作品に入れられたのか。「スペインの洗礼を受け」、カルメラという名をもった駄菓子屋の少女は、その目、睫毛、髪はすべてスペイン女性の魅力を帯び、「私」をすっかり魅了させてしまう。「私」の精神状態は、完全に「自我分裂」「二重生活」の状態になる。スペイン女性に関するこの物語はまさにカルメラ娘の美の威力を象徴的に表現したものといえる。むしろ、鞭打ちの話によって、自分の苦しい内面をよりリアルに表現している。

では、文中に、「何とかいう書物」にこの物語を読んだとあるが、これは具体的にどの作品であろうか。先に「女性」1924 年 6 月号を挙げた。この号の「世界の神秘境」というコラムにスペインに関係する二つの文章を掲載している。一つは、千葉亀雄の評論「“妻の勝利”を描いたイバネスの長編小説」。もう一つは、岡田三郎の「エスパニヤ女と闘牛」である。郭沫若「カルメラ娘」に見られるスペイン女性の物語は、岡田三郎の「エスパニヤ女と闘牛」にあった。岡田三郎と言えば、明治期から活躍し、大正後期にフランスの短編形式コント所謂ショートショート小説を日本に紹介した小説家である。彼は、「文章倶楽部」「文芸春秋」など多くの雑誌に作品を掲載した。雑誌「女性」に掲載された「エスパニヤ女と闘牛」もコント形式の作品である。内容を紹介しておく。

一人の若く美しいエスパニヤ女が、彼女に愛を歎願した男にむかひ、鞭で二十五打たせたら従はうと提言した。男が喜んで承諾し、即座に肌をぬいで彼女に背を向けた。女は彼を鞭で二十四打った。その時男はおののきながら、最後のもっとも強烈な一鞭を待ち、しかもその後に来るべき恋の歓喜を予想してまた戦きを新たにした。にもかかはらず、二十五番目の鞭はくだされなかった。女は莞爾として鞭を捨て、二十四までは鞭ったが約束の二十五打ちを果たさないから恋にはならぬと云って、血まみれになった男をそこへ置き去りにした。[48]

---

[47] 「カルメラ娘」『郭沫若全集』第 9 巻所収　pp213―214

[48] 岡田三郎の「エスパニヤ女と闘牛」「女性」1924 年 6 月号 pp90

たった九」行ほどの内容であるが、スペイン女性の残忍さがリアルに表現されている。この物語を郭沫若の作品と対照させてみると、「カルメラ娘」にあるスペイン女性の物語は、明らかに岡田のこの作品を踏まえていることが分かる。

カルメラ娘の容貌についての描写やスペイン女性の物語などが、これまで見てきた雑誌「女性」に掲載の千葉亀雄、永田寛定の文章、岡田三郎のコント式小説から影響を受けていることが明らかである。彼は、雑誌「女性」を読んだ可能性が高いと考えられる。郭沫若はこの時期、日本の翻訳や雑誌上の評論、作品からイバネスの作品やスペインに関する情報に接し、創作上の啓発、刺激を受けたと言えよう。

結論　多様な女性像のもつ意味

「カルメラ娘」に登場する駄菓子屋の少女の描写について、イバネスの影響、大正期のスペインへの関心や大正モダンの背景を見てきた。作者郭沫若は意図的にカルメラ娘にスペイン的な、或いはエキゾチックな色彩を施し、大正の美意識を反映させている。

この作品に三人の女性が登場する。カルメラ娘、「私」の妻瑞華、法学士の妻 S 夫人である。三人はそれぞれの役割を演じる。瑞華は中国人として登場するが、そのモデルは、郭沫若の日本人妻佐藤富子である。瑞華は佐藤富子と同じくクリスチャンである。「私」を支え、家庭を守る良妻賢母型の女性として描かれ、「聖母マリア」のような存在である。一方、S 夫人は日本人として描かれている。既婚者でありながら卑猥に描かれており、遊女のように「私」を誘惑する。瑞華の誠実、敬虔に対して、S 夫人の淫猥、誘惑と、二人の女性は対照的である。対して、カルメラ娘は下層社会の娘であるが、實は貴族のご落胤で、駄菓子屋や縁日の出店の看板娘、時にはコーヒー館の給仕をし、最後は東京の商人の妾になってしまう。社会の最下層に生きる娘は、社会に翻弄される運命を辿る。瑞華、S 夫人、カルメラ娘の三人は階層、教育、タイプはそれぞれ違う。いわば三者三様である。作者はカルメラ娘に少女らしい初々しさと優しさを備えさせ、更にその目、睫毛、髪飾りにスペイン女性の魅力をも」たせる。瑞華の伝統、S 夫人の軽薄に対して、カルメラ娘には大正モダンの新風を吹き込ませる。このように多様な女性像が描かれている。

多様な女性の登場は、「私」の異国生活を多彩に構成するためであることは言うまでもないだろう。当時、留学生と日本女性の恋愛を描いた作品は多く出ていた。淫書『留東外史』は有名である。郁達夫の「銀灰色の死」「沈淪」、張資平の「約檀河の水」なども留学生の恋愛を描いた作品である。郭沫若の 1920 年代の小説には異国の女性が多く登場する。[49]「カルメラ娘」にスペイン女性の要素を取り入れることで、異国情緒を豊

---

[49] 「牧羊哀話」には朝鮮の少女が登場する。「残春」「落葉」「鼠災」には日本人女性が登場する。

かに醸していると言えよう。

多様な女性像を描くもう一つの意味は、このような女性関係を巡る「私」の内面世界を浮き彫りにしていくことである。自己解剖、告白という真の目的があった。「私」は瑞華に対しては畏敬を、S 夫人に対しては嫌悪の気持ちをもっているが、カルメラ娘には掴めそうで掴めない、「消えそうで消えない幻の美」[50]を感じ、もがき苦しむ。カルメラ娘の魅力は、主に目や睫毛に集約される。主人公「私」が自殺に臨んだ場面でも、「あの睫毛美を求めて、」[51]「あの子の目、あの子の睫毛は私の魂の奥に烙印していく」[52]と自分の心を見つめる。作品は徹頭徹尾「私」の美と愛への憧憬、欲望、愛を得られない絶望と、一連の内面の葛藤を描く。このように内面世界を深く掘り下げいく創作態度には、イバネスの『裸体のマハ』の影響があったことはこれまで見てきた通りである。イバネス文学は「カルメラ娘」に見られる多様な女性像の創出に新しい色彩を添えると同時に、内面を深く掘り下げ、リアルに表現するという点で刺激を与えたのではないか。主人公が三人の女性と関わるそれぞれの場面において、様々な感情を抱く。いわば三人の女性はそれぞれ異なる角度から「私」の内面を照らし出す鏡の役割を果たしている。この問題については稿を改めて論証したい。

---

[50] 「カルメラ娘」『郭沫若全集』第 9 巻所収　pp214

[51] 「カルメラ娘」『郭沫若全集』第 9 巻所収　pp232

[52] 「カルメラ娘」『郭沫若全集』第 9 巻所収　pp238

新刊紹介

『書人　郭沫若』　武蔵野書院　松宮貴之著

先ず、少なくとも日本に於いて郭沫若の書を、評価してきた歴史がないというのに、私は驚きと不満を感じていました。1997 年は、私は北京に留学しました。その時の看板の文字、書は、ほとんど郭沫若と毛沢東のものでした。ところで、日本では、郭沫若という人物は、従来は主に四つの視角から評価されてきたと思います。一つ目は共和国の政治家として、二つ目は日本の中国史研究の近代化の先駆者として、三つ目は封建性から脱却した自由な文学者として、四つ目は日中の友好関係を推進した外交家としてです。

つまり日本では、現代中国の書法家として、ほとんど評価されてこなかった。

しかし郭沫若の書法の根幹は、実は、日本での留学期や、亡命期の研鑽が、大きな基盤になっています。そして当時(旧文化時代)を批判するカタチで、中国人民のための書法として大成しているのです。

そういう日中間の相互作用の理解が、いままで日中両国の書法研究史でも等閑だったと思います。

郭沫若の政治や学問は、日本の学者や政治家に大きな影響を齎してきました。しかし、書法については、ほとんど影響が、見られません。

これは不思議なことですが、その根本的な理由は、彼の書は、中国人民の為のものであること。そしてその所謂、「郭体」と言われる様式は、抗日戦(日中戦争)期から、作られたということが、旧中国と繋がっていた日本人書道家には、他者として、受け入れ難かったのかもしれません。

しかし客観的にみて、彼の文語と口語の融合した書は、実に美しく、日本人にも色眼鏡無しで。多くの感動を与える要素があります。また多く学ぶべきところがあるでしょう。そして本場の中国でも、もっと評価されるべきだと思います。

日本人にとっては、書道芸術内他者という妙な位置付けになるかもしれませんが、ただそういう他者意識を明確にしてから、再度、日中両国の書法美の共有化を図るべきだと考えます。中国書法は、日本書道とは、歴史の原理を異にする、やはり「他者」なのです。

よって、その自覚からスタートすべき意味で、重要な試金石となるキーパーソンとして、不可欠の存在。そのバルザック的とも言える郭沫若の書について、少しく考察しました。

そして、その物語りを大掴みに言えば、中国近現代史の流れの中に郭沫若の生涯を位置付け、彼の「書人」としての生き方と彼の書作品の変遷とを結びつけて解明しようとした、日中に於ける郭沫若研究として、新しい視点と、研究分野を提起する試みなのです。

『書人　郭沫若』目次

はじめに
書法史の二大潮流
行書と自作詩の行方
近現代中国の文人観と金石学
口語の表出と告白
プロパガンダと演出
中国に於ける芸術としての書法と近未来像

第一章　日本と郭沫若　自我の覚醒と岡山・九州の時代
（一九二〇年代～一九三六年）
第一節　在日時代に於ける郭沫若の思弁哲学と
書の基底をなす思想の断層
―五四運動期からの郭沫若に於ける独自の
儒教解釈と書の姿
思想と書
書人・郭沫若の登場
内面的風景と詩、そして書
中国革命と帝都日本
日本人士との関わり
五四運動の中で
デモクラシーとサイエンス
ドイツ文学との反照としての孔子とゲーテ
郭の孔子像
陽明学との邂逅
荘子への愛着と精神への内蔵化
独自の陽明学解釈
荘子と陽明学の折衷と書相
格物致知と書の構造
建国後の懐古
唯心論とは
蒋介石の封建思想批判
唯物論とは
市川に於ける古代儒教史の構築へ
第二節　唯物史観に拠る碑学への回帰と帖学の温存、
そして共産党員の書からの位置付け

郭沫若略歴
市川での学書の傾向
今文経学思想と碑学派の観念
帖学派と陽明学
共産党員としての白話体
第三節　市川時代の秘密活動と奴隷制社会の発見
—碑学派の発展と、金石学の西洋考古学との
接触にともなう変質
西洋考古学の影響
論文体の受容と石碑の学
『石鼓文研究』序文から見える二人の日本
第二章　抗日戦争期の書相（一九三七年〜一九四五年）
第一節　抗日戦争期に於けるプロパガンダの担当と書
—言語表象学に於ける郭沫若の「言語」「文学」
「思想」の表出としての「書」様式の分析
戦争の季節
詩作の分布
郭沫若書法研究史批判
第二節　言語表象学に於ける時間の推移と書風変遷の検証
—抗日戦争期に於ける「第一期郭体」の誕生
書と言葉
白話文の書相の変遷は
一九三七年から一九四六年にかけての作品分類と様式分析
—抗日戦線に於ける抗日宣伝活動下の新書風の形成
白話詩と古文の合流と新しい民族意識としての書風
文学に見える思想性
抗日戦線に於ける経世致用「第一期郭体」の誕生
新しい書風と音韻意識
民国期と人民共和国期と款記等の変遷と意味合い
第三節　抗日戦時の日本人左傾人脈との連携
郭沫若の社会主義構想
日本での共産党系人士との連携とその活動
日本文化人との交流
国民党左派と周恩来及び在華日本人反戦同盟
第四節　戯曲『屈原』について
戯曲『屈原』

本作の社会的背景
文白の争いと近体詩の役割
政治としての書風の意味
近現代的に見て
郭沫若の白話と文語
第三章　抗日解放から建国前期の諸政策と書の在処
（一九四六年～一九六二年）
第一節　抗日勝利から中華人民共和国の建国時代
―日中戦争終結から一九五〇年代の様式変遷について
錯綜する書風
抗日（日中）戦争終結から国共内戦期の郭沫若の書の確認
先行研究に於ける書風変遷への見解
一九四九年、共和国成立時代の文学の姿としての書
一九五〇年代前期の白話体様式の模索
建国期の書
第二節　一九五五年という節目
現職としての書
郭沫若の視察旅行までの経緯
―文部行政に携わる政治家としての歴史学構築
『考古通讯』の発刊と題字について
一九五〇年代の視察と漢詩と書
―古都西安での歴史的政治資源にまつわる活動を中心として
第三節　百花斉放の文学と書
―百花斉放期の書風、第二期郭体を巡って
社会主義への移行と百花斉放時に於ける文学と書の変貌
第二期郭体に至る変貌過程
「第二期郭体」の定義とその歴史的背景について
第二期郭体とは何か
百花斉放期の『郭沫若日記』
百花斉放時の旧詩と書
第四節　郭体書法の確立と日本での萌芽説
日本再来
九州にて
「福地万間広」詩考

第五節　大躍進政策期に於ける書法様式の類型
—「漢詩」の分析を中心とした政治性及び建築と
書法との照合
双方向性の書
大躍進期の書様式の類型
第二期郭体の淵源としての共産党プロパガンダ詩、そしてその書法
書品と建築のダイナミズム
漢詩と書法の関係と傾向—第三期郭体とその漢詩の詩境
大躍進期に於ける第一期風郭体の内容について
大躍進政策と書風
第六節　郭沫若の歴史学行政・視察旅行と詩
—一九五〇年代に誕生、一九六〇年代に確立する
第三期郭体の生成過程と横幅作品の背景
についての分析
大躍進時代と書
視察の環境と横幅宣紙、そして書
—「办公室书法」の成立
簡体字の施行と漢詩の平仄について
華清池の書
反右派闘争期に於ける第三期郭体様式の意味
第七節　詩集『百花斉放』詩の構成過程
全体構成と一九五六年時期の三首
反右闘争という転機と大躍進政策の頌歌
『百花斉放』詩の書風構造とその意味について
題辞と第三期郭体の使用条件—トーンダウンという止揚
玉虫色の文学と書
第八節　大躍進、調整時代の文学
—視察時に於ける第三期郭体から第四期郭体
までの過程とその詩、書の思想
共和国の政治家　郭沫若
一九五八年から一九六二年までの視察データ
視察と漢詩と書の意義
視察書体の様式と変遷—毛沢東の復権と詩の唱和へ
碑帖の学の超克としての郭沫若の書境
左傾化する書法
第四章　社会主義運動から文革、

そして晩年に於ける書の変貌
（一九六三年〜一九七八年）
第一節　社会主義運動から文革に至る書の在処
—郭沫若「満江紅」詩の社会史的意義を
中心にして
郭沫若と「満江紅」詩の意義と展開
毛沢東との関係と漢詩
第四期郭体に至る道程と定義
文革前夜の郭沫若
権力の書と「文革」突入前
第二節　文化大革命初期に於ける郭沫若の思想転換と書法
—毛沢東との関係に於ける書風の変貌を巡って
文革を迎えるまで
一九六五年から一九六六年にかけての郭沫若の漢詩と書
文革前夜と書の在処
自己批判時の詞と書
一九六七年時の書相と文革様式の意味
文革前の息子、郭世英、郭民英の動向
いつ、どのように、旧文化は姿を消したのか
—空白の時代の意味
付き人観
第三節　日中国交正常化交渉と郭沫若の役割
—文革中後期に於ける郭沫若の三つの書法様式
とその背景を巡って
転向へ
郭沫若の詩と詞について
残存する書の分析
—三つの類型的変貌過程と頌歌を中心にして
郭沫若と日本人人脈と毀誉褒貶
日中国交正常化に於いて—最後に託された仕事
外交と書
文革期の日本との友好工作と漢詩と書の在処
日中の歴史絵巻の制作
最晩年の書と学問—七十年の光陰の意味
おわりに
索　引

学術活動報告

本年 7 月 15 日、澳門大学の朱寿桐教授が来日され、国士舘大学にて日中文学座談会を開きました。座談会は国士舘大学大学院藤田ゼミと在日華人女作家協会とで共同開催としました。朱教授の演題は「郭沫若的日本生活与文学思维」でした。藤田ゼミから大学院生 5 名、在日華人女作家協会から 9 名、東京大学、早稲田大学から院生 4 名、登壇者 2 名、計 20 名が参加しました。

藤田梨那

2025 年学会のご案内:

第八回国際郭沫若学会国際シンポジウム

―郭沫若岡山留学百十周年記念大会―

2025 年は、郭沫若が岡山第六高等学校に留学して百十周年になります。郭沫若の医学は岡山に始まり、文学創作も岡山に始まりました。この記念すべき年において、国際郭沫若学会は日本郭沫若研究会と連携し、岡山大学の後援をいただき、国際シンポジウムを開催する予定です。

期日：2025 年 11 月 1 日（土）～5 日（水）

学会 11 月 2 日～3 日

市民講座 11 月 4 日

会場：岡山大学(津島キャンパス)

主要テーマ：

郭沫若の異文化体験と文学創作

郭沫若と古典文学、日本文学、西洋文学

創造社研究

郭沫若の史学と考古学研究

郭沫若の書法研究

史料の発見と研究

中国留日学生と近現代中国文学の関係

教学研究と郭沫若読解　など

海外は中国、アメリカ、フランス等の国々の研究者に呼びかけています。日本郭沫若研究会の会員の皆さんに奮ってご参加いただき、研究成果を発表し、意見交換を行っていただきたく存じます。後日、改めて学会案内を送信いたします。

✤✤✤

訃報

本研究会会員斉藤孝治先生は、本年 7 月 15 日に逝去されました。斉藤先生は、長年にわたり、郭沫若について調査、執筆して来られ、ご著書には、『疾風怒涛』上下があります。謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

✤✤✤

編集後記

ここに、「郭沫若研究会報」第 30 号をお届けします。今回号には３篇の論文、新刊紹介と学術活動報告が掲載されています。執筆者の皆さんに感謝申し上げます。

電子会報について、執行部は不慣れながら模索をして参りますが、今後とも会員の皆さんのご協力を仰ぎながら、更に充実していこうと努力する所存であります。

会費に関するお願い：

電子会報の発行に伴い、毎年の会費については、ホームページにて会費の振り込み番号を掲載します。振込用紙も追って郵送します。よろしくお願いします。

金額：一般会員は 2000 円、学生は 1000 円です。

口座：ゆうちょ銀行

日本郭沫若研究会　　00230－4－96273

本号執筆者・翻訳者紹介

成家 徹郎 大東文化大学 人文科学研究所
廖久明　中国楽山師範学院教授
岩佐 昌暲 九州大学名誉教授
松宮 貴之 大阪大学外国語学部非常勤講師
藤田 梨那 国士舘大学文学部教授

郭沫若研究会報 第30号
発行日 2024年11月11日
発行所 日本郭沫若研究会事務局
〒154－8515
東京都世田谷区世田谷4-28-1
国士舘大学文学部　藤田研究室
rfujita@kokushikan.ac.jp